

〈研究ノート〉

## ジブラルタル海峡圏ノート

進藤賢一

### 1, はじめに

アラブの支配に屈したイベリア半島の幕開けが8世紀初頭、アラブ・ムスリムの先兵部隊の指揮官ベルベル人タリクは、アフリカ大陸西北端から僅かな幅の海峡を超えてユーラシア大陸南西端の岩だらけの丘に上陸した。それはジブラルタル（タリクの丘）と呼ばれた。数年後にタリクはイベリア半島を支配し、フランス南部をも征服する。

それからイスラーム支配はアラゴン王国のフェルナンドとカスティーリャ王国のイサベル両王によるグラナダ解放の15世紀終わりまで続いたのである。

この8世紀近いアラブ・イスラームのイベリア半島支配は現在でも、直接、間接にこの地に刻印を植えつけ、文化的面影を色濃く残している。

この間、異なる教徒間の厳しい対立や戦闘もあったが、商業や文化での平和的友好関係が保たれ、学問や芸術、美術の面でも半島部だけでなく、ヨーロッパの地中海沿岸地域にイスラーム文化を根付かせた。

イベリア半島のスペインとポルトガルは15世紀末から16世紀にかけて海外への権益拡大でヨーロッパ地域をリードし、中南米やアフリカに拠点を築いた。そのためスペイン語は中南米を中心に広く使われ、英語、フランス語に次ぐ世界語になって今日なお広く普及している。ポルトガル語でも、南米の半分近い地域を領土とするブラジルの公用語として定着しているのだ。

だが、国王、貴族、カトリック教会の封建支配がフランコ独裁と結び、農地所有も僅かの数の封建的地主層に掌握される状況の中では、近代化も遅れがちで小作農や農業賃労働者の生活水準は極めて低いものであった。

国土の大部分が地中海性気候のスペインはかねてから「ヨーロッパのアフリカ地帯」と

いわれたように赤茶けた不毛な地域で、ヨーロッパ社会から取り残され産業発展の遅れた国といったイメージが定着していたが、独裁フランコ政権の終焉と相俟って土地所有状況も変化し、灌漑農業も浸透し始め、新しい型の農業土地利用が見られるようになってきている。

イベリア半島の一角を占めるポルトガルも農業国としての歴史が続き教会と貴族が支配的力を発揮してきたが、第二次世界大戦前には大量の外国資本が入り込み、国の産業を動かすほどになった。

ジブラルタル海峡を越えると、マグレブ諸国の一角モロッコになる。19世紀の初頭からモロッコ、アルジェリア、チュニジアにはイベリア半島やイタリア半島のヨーロッパ人がイスラーム教徒を追い出してはこの地に入植し、小麦や葡萄を栽培していたのである。

マグレブ諸国には鉄鉱石、亜鉛、リン酸塩など鉱物資源が豊富であったから、植民地時代からフランス企業が進出し、大量に採掘していた。

第二次世界大戦時、ヒトラーはスペインの地続きにある英領ジブラルタルを手に入れ、アフリカ支配の拠点とイギリス制圧の領地にすべくスペインのフランコ政権に働きかけた。スペインもモロッコ全土から北アフリカ一帯を領土化する野望があったが、これらは実現しなかった。それぞれの首領（ドン）が独自の戦略でこれらの地域を支配することから利害が対立したものと見られる。

イベリア半島は大西洋を隔て、ヨーロッパ大陸ではアメリカ合衆国に最も近い位置にある。ジブラルタル海峡はロシアから見れば、黒海、地中海を経て大西洋に出る玄関口の位置にあるのだ。

アフリカ大陸とイベリア半島を隔てるジブラルタル海峡の最短幅は僅かに13km、船でも2時間余の距離にある。海峡の地政学的位置は時にはアラブ・イスラーム世界とキリスト教世界の数多くの衝突場所になり、時には平和と繁栄の架け橋になってきた。スペイン（イベリア半島の85%の面積）、ポルトガル（同半島の15%の面積）のイベリア半島と海峡を挟んで位置するモロッコの現状を、歴史の到達点としての現代を地域的、横断的比較の観点で考えてみたい。

## 2. ジブラルタル海峡北域

イベリア半島西部と南部、そこは主にポルトガル全域とスペインのアンダルシア地方である。ドウロ川、モンデゴ川、テージョ川下流にはポルト、コインブラ、リスボンの街が発達し、グアダルキビル川の流域にはコルドバやセビーリアの街が出来て歴史の舞台を

創った。

8世紀初め、北アフリカからイスラーム教徒がこの地に上陸し、ほぼ2年間でイベリア半島を支配してしまったのである。その後いざこざを繰り返したが、キリスト教徒のレコンキスタ（領土回復）運動が実を結ぶのは15世紀後半だ。

この記述はキリスト教世界から見たイベリア史になるが、イスラーム教世界から見ればアラビア半島に発祥した勢力が北アフリカを席卷し、マグレブ諸国からジブラルタル海峡を越えて南ヨーロッパ地域に強い影響力を及ぼしたということになる。

その間、この地域にさまざまなイスラーム文化が花開き、今日でも多くの遺産を残している。レコンキスタの後、こうした遺産は破壊されることは少なく、多くはキリスト教徒の王達によって護られ、保存されてきた。13世紀終わりリスボンに大学が設立され、14世紀初めコインブラに移された旧大学はラテン語を話すことが義務づけられていたようにラテン文化が繁栄する。コインブラ大学の起源はイタリアのボローニア、フランスのパリ大学並の古さだ。

16世紀の大航海時代にはバルトロメオ・ディアスがアフリカの喜望峰に到達、ヴァスコ・ダ・ガマがモザンビーク、インド航路を発見したとされる。クリストバル・コロンの新大陸発見やアルヴァレス・カブラルのブラジル探検などもイベリア半島西部や南部の港を舞台に出港し、遙々未知の航路を航海しそれぞれに帰港している。大航海時代の舞台がこの地域だったのは周知である。

キリスト教世界の航海者たちは、一体どんな世界が創造した地図（海洋図や天体図も含め）を持参し、どの国の、どの時代の天文学や占星術を頼りにしたのだろうか。ルネッサンス以前のキリスト教世界には科学的、地理的知識はなかった筈である。

キリスト教世界が持ち得たものはギリシャ時代の科学を受け継いだ、あるいは発展、後退させた人々の知識、学問に基づいたのは明らかである。そんな形跡を探してみることは意義あることだ。

もう1つは異文化の侵入や後退が繰り返される地域は、文化的遺産が徹底的に破壊されることが多い。

芸術水準の高さ、荘厳さによって護られるケースだってある。具体的にどんな形で残ったのか。レコンキスタ以降もイスラーム世界の遺産はキリスト教徒が護り、発展させたものもある。例えばセビーリアの街は、8世紀初めジブラルタル海峡を渡ってきたモーロ人が500年以上に渡ってイスラーム文化を繁栄させた。キリスト教徒の王達はスペイン各地からイスラーム職人を呼び集め、イスラーム様式のアルカサル（宮殿）などを造らせた。セビーリアのヒラルダの塔は、モスクのミナレット（尖塔）を鐘楼として完成したのであ

るが、イスラーム建築とキリスト建築の調和の上に成り立つ。

ポルトガルは南米ブラジルやアジア各地に植民地を形成し、スペインはブラジル、ハイチを除く中南米のほとんどを支配地に治め、長い間統治した。

資源の略奪や、特産物の貿易独占で多大な利益を上げ、多くの移民をこれらの地域に送り出した。

その文化的、経済的影響や人口のプッシュ要因、プル要因も考察し、整理する必要がある。

### 3, イベリア半島の自然環境とポルト

イベリア半島は広い。60万平方キロメートル程度あるから日本の1.6倍だ。スペインが約51万、ポルトガルが約9万平方キロメートルである。ヨーロッパには38ヶ国も独立国があるが日本より広い国は、このスペインとフランス、スウェーデンだけだ。

この地方の3月は、さして高くもない山々が雪で覆われている。マドリードの北側、グアダラマ山脈のペナラーラ山は標高は2428m程度の準平原化された丘陵性の山塊であるが高い丘陵面はすっぽりと雪に覆われ、山麓の低平な土地は夏枯れの黄土色をしている。

イベリア半島は、北部の一部が西岸海洋性気候で半島内に僅かにステップ気候地域も存在するが80%は地中海性気候だ。ポルトガルは100%地中海性気候になっている。

地中海性気候は、夏は砂漠のように雨が無く暑い、冬にはマイルドで適度な雨が降る気候をいう。夏はカイロやトリポリのようになり、冬はパリやロンドンのような気候になるということだ。

リスボンとマドリードを比べてみると、実際に雨の少ない季節は6月から8月という共通点があるが残りの9ヶ月はリスボンが月平均50mm~100mm、マドリードは40mm~50mmと違いはある。原則的に夏寡雨、冬雨期（といっても降水量は少ない）の構造に変わりない。

ウラジミール・ケッペンは地中海性気候の降水量基準を多雨月と少雨月の差を3倍以上と設定しているだけである。

夏枯れの農地や牧野、グリーンが復活する秋から冬、そして春の気候変化がこの地域で見られるのは普通であるが、雨や気温ばかりは毎年同じ時期に、同じ量、同じ気温になるわけではない。

マドリードから北緯40度の緯線に平行するように西に向かう。浅く浸食された谷はと

ころどころ人工的なダム湖になっている。河川や人工湖近くには集落が分布している。大抵は赤い屋根、白い壁を基調とする家屋が集村を形造っているが、人間の営みが水中心に組み立てられているのだ。

平坦な大地がややくすんだ茶褐色をしているのは冬の降水量が少なかったのと、雨期と乾期の暫移時期に当たるためであろう。

北を東西に走行するカンタブリカ山脈の頂上部は雪を被った長い雪線に見える。

西流するドウロ川が見えてくるとポルトガルに入ったことを実感させる。川の規模も大きい峡谷をなして深くえぐられた地溝帯でライン川中流部に似た景観だ。

ポルト空港に近くなったせいか飛行機は低いところを飛んでいるからドウロ川の谷壁のブドウ畑の様子が手に取るようにわかる。

上流部はアルト・ドウロ地方といってポートワインの主産地だ。

斜面に醸造用ブドウ棚の規則正しい線に混じって白壁に茶褐色の屋根の農家が点在する光景はライン谷壁とは異なり、斜面の斜度があまりきつくない証明だ。

むしろ、スイスのレマン湖畔南壁にあるブドウ畑の様子によく似ているように思える。

アルト・ドウロ地方にはトゥア、ピニャオン、メザオン・フリオなどポートワインの集散地があるが、最大の集積所はレグアである。

レグアと河口に近いポルトまでは100 km、19世紀末にワイン運搬用として敷かれた鉄道で1時間半の距離であるという。

ポートワインは運搬船を利用してポルトに運ばれ、海外にも輸出されてきたのだが、現在は輸送手段がトラックに変わっている。

レグアからドウロ川の上流23 kmにワイン産業の要衝といわれたピニャオンがある。

ポルト駅構内のタイル絵（アズレージョ）にはワイン樽を帆船でポルト方面に輸送している大きな額が飾られているが、こうしたアズレージョは各所に飾り付けられている。

ドウロ川が大西洋に流れ出す位置にポルトの街がある。昔はオ・ポルトとっていた。

河口はヨーロッパに多いラッパ状エスチュアリー（三角江）であるが、南からプライヤ・デ・ラヴァドーレスという半島が突きだしている。

道路側の右岸ドン・ルイス1世橋の近くに14世紀前半に建てられたといわれるポルトガルを大航海時代に導いた立役者、エンリケ航海王が生まれたとされる家がある。

大西洋のマデイラ諸島、アゾレス諸島や中部アフリカのギニア湾岸に到達して奴隷や金を本国にもたらしたポルトガル人を王室が指揮し、援助したのである。

以後、ポルトガルの航海者達はアジア諸地域や南米にまで進出する。

マドリッドから空路50分、ポルトガルのポルト空港に着いた。空港は市街地に隣接し

ている。



ドウロ川に浮かぶワイン樽運搬船。流域一帯で醸造されたワインをポルトに運び輸出していたが、今日ではトラック輸送に切り替えられている。

#### 4, ドウロ川とポートワイン

ポルトは坂が多く、歴史の古さを思わせる街路が縫うマチである。真ん中を地溝が口を開け、花崗岩の露頭がむき出しになっているが、グラーベンの底を流れるドウロ川によって街は二分される。

分離された南北の街を繋ぐ4つの橋があるが、1886年完成した2階建て橋ドン・ルイス1世橋は下を車の道路と歩道、2階は市電軌道と歩道の組み合わせで、その間を太鼓のような鉄製橋梁が支えている構造だ。路面を除けば全て鋼鉄製でコンクリート部が見えない。上部の橋の高さは80m程、長さは350m位だ。エッフェルの弟子による設計だといわれているが、橋の形はポルトのシンボリック的存在である。

ドン・ルイス1世橋の袂から下流にかけた左岸はポートワインを飲ませるレストランなどが立ち並ぶヴィラ・ノヴァ・ガイアである。30を超えるワイナリーもある。

町並みから外れドウロ川に突きだしたレストランでヴィンテージ・ポートワイン（20年もの）を飲む。ボトル1本70ユーロ（1万円強）でコクがあり、口当たりも良く、上品な香りはするがやや甘い。

ポルトはワイン・イメージで売り出しているが、地ビールもコクと味において群を抜くうまさであった。エビシチューにオムレツ、牛肉ステーキを注文したがアルコール飲料の味と香りが食べ物を一層引き立ててくれる。

川縁には過去にポートワインの輸出に使われた小さめのラペーロ（帆船）が20艘以上2列で係留されている。

ラペーロの船上にはワイン樽がいくつも積み上げられているので往時を偲ばせるが、今

はつかわれていない。

ポートワインが、一般のワインと異なるのは一次発酵の途中、ブランデーを加え発酵を止めて酒精強化ワインにする点である。ポートワインと一口にいても熟成の年数や熟成する場合、瓶詰めか樽詰めにするかによっていろんな種類が生まれるのだ。

17世紀、スペインのワイン製造に対抗するため、関税特権を与えられたイギリスの企業がポルトガルに進出し、ポートワイン醸造を始めた歴史がある。

川の上流はアルト・ドウロと呼ばれ、川の緩斜面にヴィンヤードがあって、ここで収穫され醸造された葡萄酒をポートワインというのである。

山の斜面のブドウ畑の秋はランショ（ブドウ収穫労働者）の手摘みされたブドウを機械で搾る。

搾られたブドウ液は樽詰めされて越冬し、熟成させて瓶詰めし、ラベロによってポルトに運び出されたのである。それも1960年頃までで輸送手段はラベロから次第に鉄道やトラック輸送に切り替えられた。

対岸は緩い斜面を利用して6~7階建てのビルで埋まっているが屋根は赤く、壁は白か黄土色が多く、古い街の風情が漂っている。壁には付近の花崗岩を利用した石造りのものも多い。

超軽量で凄く長いカヌーが時折かなりのスピードで川面を通り過ぎて行く。日本では滅多に見ることのない競技用カヌーであるが、ポルトのドウロ川に限らずコインブラのモンドゴ川、リスボンのテージョ川、セビーリアのグアダルキビル川などイベリア半島の都市貫流河川ではよく見かける光景だ。1人乗りと2人乗り、4人乗りのサイズがある。普通のカヌーと比較すると幅が狭く長さが長い。軽量で1人が2オールを漕ぐからスピードがあるのが特徴で、ドウロ河畔には「カヌー貸します」の表示もある。

ドウロ川左岸のドン・ルイス1世橋付近は街を見下ろす公園になっているが3月中旬は桜の見頃な季節である。ポルトの緯度は北緯41度、日本で言えば津軽半島か下北半島に該当する位置であるから、大西洋岸ポルトガルの桜は日本より1ヶ月以上早いのであろう。

この季節、濃霧がかかる時間がよくある。あまり日射に恵まれているとは言いにくい。桜が咲いていても肌寒く、アノラックを着込んでいる市民を見かける。花冷えかもしれない。

河畔の絶壁を上下するケーブルカーが動いている。これは河畔の下道と、80m高い上道を繋ぐもので、ドン・ルイス1世橋の下橋と上橋の高さを行き来するのである。斜面がきついからケーブルカーのスカートが自動的に対応し乗客の乗車面がフラットになるよう工夫されている。

ドン・ルイス橋梁の傍に、12世紀に要塞として建てられた荘厳なカテドラルがある。17から18世紀に改修されたといわれているが、北面のバロック様式回廊はグレリゴス教会を設計したイタリア人建築家ナソーニによって1736年付け加えられたと説明される。

回廊はゴシック様式でカテドラルの前には人を頂上にもつペロリーニョ塔が立っている。高台のカテドラル広場からドウロ川の展望はワイン工場やワインレストラン街を見渡す絶景位置にあった。

広場の近くに魚と野菜の市場があるが建物はコンクリート造りで屋根に当たる部分は芝生を張った奇妙な平屋建て、しかも斜面に沿って斜めに建てられている。苺、オレンジ、ネクタリンを購入したが市場のせいかかなり格安だ。ポルト駅に近い市民の台所である。

民家の建物にも絵を焼き込んだタイルが張られたりして趣を添えている。何かサンパウロカリオデジャネイロの街角の雰囲気か漂っていると思うのは、ポルトガルがブラジルの宗主国であった時代の文化的繋がりであろうか。

カテドラルにほど近い場所にサン・ベント駅がある。駅とは思えないようなアズレージョが見事というほかない。駅構内のホールの中、タイルのような陶器に絵を描いた巨大な壁絵であるが、ジブラルタル海峡に近いアフリカのセウタ攻略の絵、ジョアン1世のポルト入城の絵など、いずれもジョルジュ・コラコ作品だ。

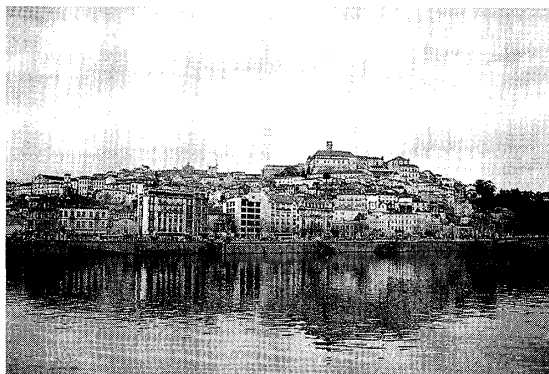
サン・ベント駅もヨーロッパの多くの鉄道駅と同様、行き止まりで線路の正面に駅ホールがある。ホールを出ると放射状のドウロ川に向かう街路があり坂を下っていくので、駅は丘の上にある感じだ。

街のなかで特別目立つ存在が76mのグレリゴス教会塔だが、18世紀に建てられたバロック様式である。塔の高さはポルトガル随一という。

バロック時代の建物のなかでもバロック装飾の極致といわれるサン・フランシスコ教会は、14世紀に建てられたころはゴシック様式だったが17世紀にバロック様式に改装されている。

こうした歴史遺産をみているとプラハの街が思い出される。ゴシック、ルネッサンス、バロック、アールヌーボーなどが時代を追って見られる、まさに建築史の博物館だ。





モンデゴ川右岸の丘陵上の建物群はヨーロッパでも最も古い大学の1つ、14世紀初頭に建設されたコインブラ大学。

## 5. こぢんまり纏まった古い大学都市コインブラ

3月7日、ポルトの宿ペンサオ・クリスタルを出ようとするとき日本の若者3人に会った。彼らはヨーロッパ最西端ポルトガルのロカ岬からアムール川河口のニコラエフスクナムーレまで7ヶ月かけて自転車で走破するのだという。パンクを修理してからスペインに向け出発する。

緯度差は15度程度であるが経度差は130度のユーラシア大陸横断である。カムチャツカ半島からサンクトペテルブルグまで往復した大黒屋光太夫の「北槎聞略」を思い出すまでもなく厳しいシベリアの旅が待ち受けていると思った。

コインブラ方面への列車は宿に近い終着駅サン・ベントでなく、街の東にあるカンパニア駅から乗り込む。タクシーのベントで駅前まで行き、駅前の売店で昼食のパンとジュースを買って汽車に乗り込んだ。

二等車であったが清潔でゆったりしている。線路が広軌だからスピードも出る。車窓から写真など撮れない。

耕地が広がるが春先でまだ播種前と見えて作物などはわからないが葡萄棚が出てくる。棒を立てそれを横に針金で結んだだけの単純な方式で生食用でなく醸造用葡萄が栽培されていた。

流石、ポルトガルはワイン製造の国である。

1時間10分でコインブラB駅に着く。宿を探したが駅前にそれらしきものはない。乗り換えて5分コインブラ「A」駅だ。こちらが本物の街でB駅は路線の分岐駅に過ぎない。駅前の安宿「フロール・デ・コインブラ」に行き、宿泊交渉したが英語は全く通じない。通りかかった若いイタリア人を介してなんとか泊まる約束を取り付ける。

案内書にはアットホームな雰囲気以学生向け長期滞在用部屋もあると書いてあるが、古い建物で天井が高く、窓枠にも狂いが生じているから備え付けの電気ヒーターをつけても室温はかわらない。シャワーも一定時間だけ熱い湯が出るし、トイレも清潔で部屋代(2人分)は3700円と安い。しかし、よく見ると電灯はシャンデリアが2基あるが1つは電灯が切れているし、椅子の背もたれで木製の支え木や、ベッドの支え木が一本落ちまた一本落ちるといった具合で、そのうちに背もたれは使えなくなる。ベッドも波打っていてフラットにはならないが、布団を重ね着して暖かさだけは保つことが出来た。午前3時から5時間くらい停電か、無理に電気を止めたかわからないが、真っ暗ヤミを経験した。80歳代の老婆2人が経営しているようで、そのうちに妖怪でも出没するのではないかと思った。

こぢんまりとした、しかしなにか古風な人口9万人の都市コインブラである。人口9万人といっても、ポルトガルではリスボン、ポルトに次ぐ第3の都市だ。コインブラの名は大学関係者なら知る人も多い。

コインブラ大学の創設は1308年である。その前1290年にはリスボンに置かれていたが、コインブラに移された。その後リスボンとコインブラを往き来し、コインブラに定着したのは1537年とされている。

14世紀のはじめといえば、日本では鎌倉から室町時代のころで武士社会が成熟期に向かうあたりだ。

大学の創立者はディニス王とジョアン3世で、その像は「無情の門」と呼ばれる鉄門を潜った中庭にある。さらに中には、左にはカブラ(山羊)と学生達が呼んでいた高い時計塔が荘厳な雰囲気ですびえ立つ。18世紀頃建てられた図書館、礼拝堂、さらに博物館など、後の世界の大学でお手本になるような建築様式と大学機能が揃っている。

コインブラ大学はラテン語を話す義務がありラテン語教育で知られている。

学部は文学、薬学、医学、法学、化学などで学部カラーが決まっている。これはパレードなどで学部色を鮮明にするためだともいうが真意はわからない。

冬の寒い時期、学生達は黒いマントを羽織るのが慣わしで今でもこの習慣は続いている。

北西から南東に流れる幅200mのモンデゴ川の左岸は緩い丘になっていて最上部に白亜の校舎が坐っていて川辺縁から見る光景はいかにも大学都市のイメージだ。

坂を登るのが大変なひとのために広場からエレベーターがある。

ポルタジェン広場からサンタ・クララ橋を渡りモンデゴ川の左岸を下流に4kmばかり歩いてみた。

陽は穏やかで春の陽気であるが気温は低く、冬用のアノラックを羽織って丁度いい感じ。

桜やアカシアが咲き、土手や草地の緑は濃さを増してきている。

この地のアカシアは日本に多い白い花の咲くニセアカシアではなく、黄色い花の純粋なアカシアである。木の大きさはさほどでないが花は頑固に「わしがアカシアの本流じゃ」と自己主張している感じに見えた。

川はやや下流で堰き止められているのでこの辺りは湖の佇まいである。川面を走る2人乗りのカヌーがスピードがあるせいか、水面に投げた石の水切りの印象を受けた。

左岸は新・旧のサンタ・クララ修道院と軍事博物館などが見えるくらいで木々が多く平地は空き地が目立つが、右岸は斜面にホテル、レストラン、カフェなどが立ち並び一番高いところがコインブラ大学と新カテドラル、サンタ・クルス修道院などがそびえ立つ。

川の下流は新規のビルが建ち並びマンションなどに利用されていた。

川幅200mのモンデゴ川の両岸を8km程度散歩したが黒いマント服のコインブラ大学生には会うことはなかった。

コインブラ駅前のバイーシャ地区は迷路のような細い小路が交錯していて商店街を形成しているが、日用雑貨、肉、魚、野菜、金物、酒類を売る店がひしめいている。

品物が路地に氾濫しているという感じではなく、間口は狭く奥まった所に商品を置くスタイルだ。綿製品や麻製品、糸など繊維製品が多く、シーツカバー、食卓カバー、ランチョンマットなどや陶器を売る店がひしめき、どうみても地元住民の購買市場ではなく観光客など外部からの客をターゲットにした品揃えに見えた。

綿を「アルゴダン」とか麻を「ラミー」、ありがたいは「オブリガード」というのはブラジルで良く聞いた言葉だが、ブラジルもここと同じポルトギス（ポ―語）の地域で親しみがある。

## 6. ヴァスコ・ダ・ガマの寄港地リスボン

鉄路リスボンに向かう。リスボン近くで苗代状態の水田を見つけた。灌漑用水路もしっかり付いている。一方畑地には灌漑用で大型のピボット・セントラルが置いてある。

ここは地中海性気候で地中海式農業地域であるから稲作が可能であることは十分理解出来るところであるが、ヨーロッパの灌漑用施設はこの15年から20年の間に急速に進展した。30から40年前、全く見る事が無かったスプリンクラーやピボット・セントラルなどの灌漑用機械が導入され、灌漑の装置化が拡大して単位面積当たりの生産性が向上しているのである。

これは地中海性気候地域だけではない。フランス、スイス、ドイツなどの混合農業地域

でも例外ではないのである。輪作体系がほぼ確立し、施肥技術や肥料の投入量も一定の限界に達し、新しい課題として水の供給が生産力水準の向上に重要性を帯びてきたのである。

農地を含む土地の所有も世襲農園として大土地所有制も残っていた。これはローマ時代からの遺物で、ポルトガルの影響を受けたブラジルではファゼンダとよぶエンコミエンダ制が確立し、今日に至ってもファゼンデイロ（大土地所有者）とコロノ（小作人ないし農業賃労働者）の関係が崩壊していない。アルゼンチンの大土地所有形態エスタンシャはもう崩壊しつつあるが、ブラジルの場合は健在である。

ただし、ブラジルのファゼンダ農場で働くコロノ（農業労働者）の賃金や労働条件向上の要求は強く、その力が政治に反映しているから農場主の利益率も昔のようにはならない。

トーマス・クックの時刻表通りにリスボン行き汽車が進んでいない。車掌にそのことを質すと「この時刻表は間違っている」という。そんな馬鹿なことはない、といっても聞き入れない。

汽車は午前中にリスボン、アポーニア駅に着いた。駅はテージョ川に面する街の中心からやや東に位置する場所だ。

取りあえず駅インフォメーション事務所でホテル・アベニーダ・パルクを探し2泊分（一泊2人分7500円）の予約をする。地下鉄パルク駅から2分ということであるが市街地の土地勘がないのでどのあたりかわからない。パルクというから公園の傍らしい。

アポーニア駅前には1000トン以上もある大きな客船や貨物船が横付けになっているから港湾の一部をなしている。河口から10km以上上流であるが大きな港だ。

川といっても湾入部であるから湖のように広い。橋も2本のみであり橋梁の長さはヴァスコ・ダ・ガマ橋が11km、アブリル橋は4kmもある。市街地はテージョ川の河口から12kmにありヨーロッパ大陸最西端の首都だ。

人口は66万人と多くはないが、起伏の多い古都である。「7つの丘」の都とも呼ばれているが、7つの丘はローマにもある。

バスは市域のバイシャ・シアードを通り抜け、北上してパルケ近くの停留所に行く。

バイシャ街区はやや長方形だが碁盤目状で荘厳な古い建物群で埋め尽くされているのは大航海時代から世界に羽ばたき、植民地を確保して多くの財宝を本国に持ち帰り、また植民地支配のなかで生み出された価値をリスボンに集中させた結果できあがったもの。街の景観からひとめでわかる。

テージョ川に近い国立古美術館、シアード美術館、パルケ近くのグルベンキアン美術館も同じで、そうした大航海時代以降ポルトガルが最も輝いた時代の蒐集遺物にほかならな

い。

## 7. ポルトガル人と大航海時代

ポルトガル人は16世紀、日本に来て鉄砲やキリスト教を伝えたことは良く知られている。

15から16世紀は大航海時代でポルトガルからはヴァスコ・ダ・ガマ、バルトロメウ・ディアス、アルヴァレス・カブラルなど著名な航海者が輩出し、喜望峰航路、インド洋航路、ブラジルなどの発見に結びつけ、ポルトガル人の海外渡航や海外移住を盛んなものにした。

現在でも人口の20%にあたる200万人がブラジルなど海外で暮らしている。

ここで少し大航海時代のポルトガルの世界へ飛躍した状況を見ておきたい。

15世紀初め、ポルトガルは金、小麦、砂糖を求めてジブラルタル海峡に近い北アフリカのセウタに進出するが征服地の支配継続が困難になり、16世紀後半には占領地を放棄しポルトガルの北アフリカ進出は挫折した。

だが、平行して大西洋とアフリカ西岸に進出して大西洋上のマデイラ諸島（1418年）、アゾレス諸島（同年）などを発見する。

エンリケ親王をはじめ皇室が積極的に航海をサポートし、海上貿易や漁業が盛んだったことから航海技術に長けていたことなどが背景にある。

ポルトガル人は1460年にギニア湾に達し、奴隷や金をポルトガルに持ち帰るようになった。コロンブスの航海に先立つこと30年も前のことである。

1488年にはバルトロメウ・ディアスがアフリカ喜望峰に到達し、1497年から2年かけてヴァスコ・ダ・ガマがモザンビークやインド航路を発見した。

インドからは宝石や香料が本国にもたらされたわけだが、重要なことはヨーロッパ貿易の通路を地中海から大西洋に変え、リスボンをヨーロッパ貿易の中継地としたことである。

1500年にはカブラルがブラジルのブランコ岬に到達して、直ちにブラジルを併合し、10年後にはインドのゴアを征服、占領する。その翌年はマラッカ海峡を掌握して太平洋への拠点を確認し、さらにセイロン島を占領して権益を拡大するのである。

1514年には中国到達、1543年には種子島到着、1557年にはマカオの永久租借権を確認してアジア支配を拡大していった。

南アジア地域では一定程度アラブ世界の貿易圏が出来ていたからポルトガルやスペインのこの地域への進出はアラブに対する挑戦に勝ち抜いていったことになる。

1492年のコロンブスの新大陸発見から1519年のマゼランの世界一周までの僅か27年

の間にポルトガルとスペインはアジアと南米に破竹の攻勢をかけ、短い期間に勢力を広げたのである。

17世紀になって、ブラジルで金鉱脈やダイヤモンドが発見されるとポルトガルの繁栄も頂点に達し、ブラジルからの希少資源（レアメタル）の略奪は以後1世紀に及ぶのだ。

こうした地域の征服・侵略は略奪や価値収奪をともなって富をリスボンに集中させ、貿易関係者や資産家のもつ膨大な富は、国内産業の育成にはあまり投資されず宮殿建設や商業ビルの建て替えなどリスボンの街を改造していった。

岩波書店発行の「大航海時代叢書」に収められたランド・マックナリの大航海時代地図にはポルトガル人の発見地が地中海、紅海を除くアフリカの全海岸線に及び、アラビア半島のマスカットやペルシャ南岸、インド西岸、セイロン、スマトラ、ジャバ、ブラジル、アルゼンチンの東海岸などに及ぶとなっている。

しかし、ポルトガルの勢いも長続きはしなかった。

大規模な船団を送り込んでゴア、マラッカをはじめ重要拠点に砦と交易所をつくり、インド洋とアジア貿易を支配したポルトガルも1640年から60年にかけてポルトガル領マラッカを、続いてセイロンをオランダに奪われ、ポルトガル領ボンベイ（現ムンバイ）をイギリス領に編入され、20世紀にはインドがゴアを武力併合するなどポルトガルの植民地支配力は確実に衰退した。

宗主国が植民地を失うことは産業構造を変えない限り、再離陸に繋がらないという教訓を残した。

19世紀になりナポレオン軍がポルトガルに侵攻して以降、富の流入ははかばかしくなく、また植民地であったブラジルの経済力がポルトガルを上回り、ブラジルが独立宣言するようになると、「ポルトガルはブラジルの植民地」といわれるように宗主国とブラジルの逆転現象すら生ずる。

20世紀も後半に、マカオを除く全ての植民地が独立するとポルトガルは、単にヨーロッパ共同体の一角を占めるに過ぎない位置にまでなったのであるが、過去の繁栄の足跡はリスボンやポルトのマチの遺産として残されることになった。

リスボンのテージョ川から南の地域を中心に1974年4月の革命以後、農業労働者による大規模な賃上げ争議があり、背後に共産党の支援があったことが在ポルトガル日本国大使館の資料に示されている。

農地改革の先取り名目のもとに農地の不法占有が行われ、集団農場が出現したのである。

75年5月には30ヘクタール以上の農用地等収用法律が制定、翌年に憲法によって大土

地所有制が廃止され中小農家の保護や農業労働者の生活向上等を目的とする農地改革が実施された。日本の農地改革から遅れること 27 年後である。

日本は連合軍の占領政策の一環として強圧的に地主解体を実施したので比較的スムーズに改革が実施されたが、ポルトガルの農地改革では、農地の不法占拠やその他の不法行為が頻発するなどして社会的緊張が高まったなかで農地の移転が始まった。

ポルトガル政府は農地の区画整理や中小農家の保護を目的とする法令を次々公布し、農業融資を増額して対応したのである。

農地改革によって農家 1 戸当たりの農地は増大したが直ぐに農業生産力が増したわけではない。農地改革をめぐる混乱や天候不順があったからだ。

しかし、改革の目標を生産性の向上や農作物の多様化、経営の合理化に定めて実施したため、少しずつ農地改革の実績は上向きになった。

麦類、米、トウモロコシなどの穀類、豆類、葡萄やオリーブなどの樹木作物、ジャガイモ、タマネギなどの野菜の生産高が拡大していったのである。

## 8. ラテンアメリカ大陸の富で発展したセビーリア

2006 年 3 月 11 日、リスボンの気温は 11 度 C で寒い朝だった。リスボンからセビーリア行きの列車はない。地下鉄でパルケ駅から北のプラザ・デ・エスパーニャまで行き、長距離バスに乗り換える。このバスターミナルからは 1 日 1 本リスボンからマドリード行きが出ているが、ポルトガルとスペインの国境の町バタホスで乗り換えセビーリアまで 8 時間ほどかかる。

バスターミナルの荷物検査は入念だった。航空機並みのテロ対策である。

朝 9 時半、ターミナルを出発したバスはテージョ川に近い東リスボンまで市内を走る。大型バスはほぼ満席だ。東リスボンは 2 日前鉄道で通過したとき随分奇抜な鉄骨がむき出しになった芸術作品だったと思ったが、角度を変えて見ると並の駅ではない。京都駅とは発想が違うが、駅にもこんなものがあるという珍しい鉄骨組みのデザインだ。

東リスボン駅を出ると間もなくテージョ川を渡る 12 km の橋梁にでる。船舶の航行を妨げないため一部ワイヤー支柱の吊り橋状になっている片道三車線は、ポルトガル出身航海士の名にちなんでヴァスコ・ダ・ガマ橋といい、リスボンの名所である。

ガマはインド航路発見者として知られているが、「大航海時代叢書」によると、ガマに同行したペロ・ダランケルはバルトロメウ・ディアス（バーソロメウ・ディアス）の喜望峰までの航海に同行しているからアフリカの西海岸沿いのコースは新発見とはいえない。

また、喜望峰に近い南アフリカ共和国のインファンテ川から東海岸、ケニアのモンバサまでは地元の領主2人に水先案内人を頼んでいる。紹介された水先案内人はイスラーム教徒であった。

水先案内人達は「ジュノア人の羅針で舵をとり、四分儀と航海図を有する」とあり、ガマがアラブの世界の科学に依拠して航海をしたことがわかる。さらに、モンバサからインドのカリカットまではモンバサの王が提供したインドの水先案内人に先導させている。

キリスト教徒であったインド人のなかにはアラビアと絶えず往き来していた人々もいたためアラビア語を解する、との記述もある。

ヴァスコ・ダ・ガマのインド航路発見は、裏を返せばポルトガルから喜望峰まではディアスの航路を辿り、モンバサまではイスラームの水先案内人が、カリカットまではインド人が航路を案内したのだから、新発見と言えるのかどうか、疑問が湧くところだ。

キリスト教世界の人々にとってインド洋やアラビア海は自由に往き来することが出来ないほどアラブやインドの勢力圏が大きかったとも言えるのではないか、そんなことを考えてヴァスコ・ダ・ガマ橋を渡った。

橋のあたりはテージョ川の下流部で非常に川幅が広がっているから橋梁は長くならざるを得ないのだ。

ヴァスコ・ダ・ガマ橋を渡ってテージョ川左岸に出ると一面牧草地が広がる。地中海性気候といっても3月はまだ雨期、さらに大西洋岸とあって湿潤な季節であるから緑に包まれているが川沿いの木々はまだ芽を出していない。枯れ木状態のもの、やっと若芽が出はじめた光景が続く。

低い丘陵性の波状台地には見事な醸造用葡萄畑があるが、こちらも芽がでたばかりで葡萄枝を棚にくくりつける農夫達の手作業姿を見ることができた。10人くらいの農夫がたまって作業している。

オリーブ畑の樹林は必ずしも規則正しい状態ではなく、下地は緑に被われていて牛や羊の放牧地になっているが、ここは夏には枯れ草になってしまうのが普通だ。

牧草地に長さ200mほどのピボット・セントラルが横たわりその向こうに30頭ばかりの茶色の肉牛が草を食べている。

移動式灌漑装置のなかでも近代的なピボット・セントラルはアメリカ合衆国の乾燥農業地帯で開発、普及したのであるが、いまでは世界の近代化された農業地域ではごく普通に見られるようになった。

日本のような規模が小さく、降水量や用水に恵まれた地域にはない灌漑装置である。



ヨーロッパでの普及もこの20年くらい前からだろうか。それ以前は見たことがない。

地中海性気候地域では晩春から初秋にかけての夏の間は乾季にはこうした装置が威力を発揮し、土地生産力向上に役立つ。

石造りのアーチ式水道橋を潜り抜ける。古い時代のものだ。橋脚のあたりはオレンジが黄色い実をつけている。

少し高い丘があると丘上集落がいくつも出てくる。石造りの高い塀に囲まれ、その中に小高い城郭が姿を見せる。

斜面にはオリーブ畑が展開し、丘の足下は茶褐色の屋根に白壁の新しい集落がある。こんな光景はスペインのイベリア高原やイタリア中南部のアペニン山脈にも共通している。

日本のように城内に武士が、城下に街ができるのと違い、こちらは民も共々領主の城内に住ませたのだった。

葡萄園とオリーブ畑ばかりの田園地帯を東に走り、ポルトガルとスペイン国境を越えるとバダオスの街に出る。昼食をとってセビーリア行きのバスに乗り換える。

バス・ステーションの横にU字溝の用水路があるが、この季節、水は流れていない。

北部と北西部の西岸海洋性気候地域を「湿ったスペイン」というが、その他の地域は降水量が少なく灌漑の必要な「乾いたスペイン」である。

カルタヘナからマラガに至る南部地方は年間日照時間が3000時間を超えガリシアからピレネーの北部地方の2倍近くに達しているのだ。

19世紀後半から運河やダムの工事が始まり、20世紀の中葉（1952年）フランコが立案した「バダホス計画」が実施に移され、バダホス、メリダを含むグァディアーナ川流域の灌漑事業は急速に進んだ。

ダムの総容量300億立方メートル、灌漑面積250万ヘクタールの数字が示されている。（増田義郎「スペイン」）

しかし、1960年代の高度経済成長によって農村人口の大規模な都市移動がはじまり、農村の社会構造にも変化が現れたが、大土地所有などの本質的改革は進んでいない。

かつてメセタを中心にスペインを代表した羊毛を刈り取るための羊は近年急減し、代わって肉牛が増えている。（在スペイン日本国大使館「各国便覧叢書スペイン」）

メセタ産のメリノ種はオーストラリア開拓当初、ボタニー湾から運び込まれ、オーストラリアの牧羊業を担ったことで良く知られているが、最近ではオーストラリアでも牧羊は生彩がなく牛や鹿が増える傾向にある。

鹿というとやや奇異に感じられるが、鹿は肉だけでなく皮革や角などの需要がある。特にアジアの国々で漢方薬原料として要求が強い。旧羊牧区のフェンスを高くすれば鹿飼育

地として使える。

畑地と思われる耕起された土地には野菜か穀物が播種されるだろうが、初春の今はわからない。

梨園があり数百本の木々が一斉に花をつけている。木々の下はタンポポなどの花が咲き乱れている。3月はそんな季節である。

イベリア高原のスペイン側バダオスから南下してシエラ・モエナ山脈を越え、アンダルシア地方の中心都市セビーリアまでの車窓の景色はいかにも地中海性気候地域でオリーブ園とビンヤードの樹木作物地帯だ。

オリーブ園の下地には緑青々とした雑草が生え、茶褐色の肉牛が放牧されている光景はポルトガル側と変わらない。

少し小高い丘で荒地になっている野草地には体の大きいメリノ種も放牧されているが近年はスペインだけでなく、オーストラリアやニュージーランドも羊の飼育は減少傾向にあり、代わって牧羊飼育は中央アジア諸国や中国西部が急増している。

オリーブ園と葡萄畑中心のエストレマドゥラ地方を南下し、シエラ・モエナ山脈を越えるとアンダルシア地方、セビーリアの街に出る。

スペインの南部地域をアンダルシアと言う。

北側がシエラ・モレナを含むスプベティカ山脈で中部スペインと画され、南側はシエラ・ネバダを含むペニベティカ山脈が地中海とを画すやや盆地状の広大な溪谷で中心低地を西流するグアダルキビル川に沿ってコルドバやセビーリアの街が立地した。

ペニベティカのムラセン山 (3487 m) はイベリア半島の最高峰である。

北のスプベティカ山脈は 1000 m から 2000 m 標高であるが、北と南の山脈から流れ出す河川がコルドバ平野やセビーリア平野を肥沃な穀倉地帯につくりあげている。

問題は気候だ。

夏は毎日 40 度 C を超す暑さと強力な日射に恵まれるが、降水量がほとんどない砂漠状態である。日中は 45 度 C あっても夜は 10 度 C 前後に急降下する。日較差は砂漠並に大きい。

灌漑なしで栽培でき、かつ収穫可能な作物はオリーブくらいのものであった。

しかし、イスラーム時代から灌漑施設が整備され、穀物や野菜なども栽培されていた。

晩秋から初春にかけては 400 mm 前後の雨には恵まれる。

但し、地域によって降水量にも違いがある。東部のアルメリアでは 200 mm だが、マラガでは 500 mm 程度になる。

冬は多少の雨が降るが、気温は最高で 20 度 C、最低は零下になる。

冬期間を利用した作物栽培も、作目選択が難しい。だから勢い樹木作物のような乾燥に強く、冬を越えられるものが卓越する。

夏の日射、気温は十分であるから灌漑施設の近代化が土地生産力向上の決め手になるのだ。

灌漑施設の普及していない地域では乾燥に強いオリーブ、葡萄、小麦、マイロ（グレンソルガム）、トウモロコシなどが栽培され、灌漑施設がある地域では米、野菜、綿花やオレンジなどの果樹もある。

元来、乾燥に強い作目でも、水の供給があれば土地生産力があがるので、乾燥農業地帯にとってはイリゲーション・システムの構築が何より重要である。

グラナダやコルドバ方面から西流するグアダルキビル川の下流にアンダルシア地方の中心都市セビーリアがある。人口は 70 万人だがスペイン第 4 の都市だ。

アンダルシアは 5 世紀の民族大移動期に、この地に侵入した「ヴァンダル族」に由来し、イスラーム時代には「アル・アンダルス」と呼ばれたことからこの地名はきている。

気候は夏期サハラ砂漠から吹き付ける熱風シロッコの影響で高温・乾燥し、冬は温暖で降雨に恵まれ夏枯れから緑の大地が回復する、いわゆる地中海性気候だ。

日本人にとってアンダルシア地方はフラメンコの踊りと音楽、闘牛の地域、地中海の避寒地などを思い起こさせる。快活で裕福な地帯として繁栄してきた印象を抱くが、かならずしもそうではない。スペインのなかで最も貧しい地帯であったとの評価がある。

南部イタリアの人々がツバメとってアルゼンチンをはじめ、端境期を利用して南米各地に出稼ぎに行ったと同じように、アンダルシアの小農民はバスク地方やカタルニア地方に出て出稼ぎで生計を立ててきた人々の多かった地域だ。

この動きは、ヨーロッパ共同体の結成以降も共同体内の先進工業国に労働者として出稼ぎする傾向になった。ドイツやフランス、ベルギーなどで働くのだ。

マラガに近いミハスであっても、今でこそ観光を売り物にした農村として写真や絵の材料を求めてやってくる観光客の象徴的存在であるが、もともと、「太陽海岸ではなく飢餓海岸」といわれたほど貧しい地帯であった。もちろん、大土地所有制の存在が多くの貧困農民の発生を必然的なものとしていたのである。

アンダルシア地方の文化的特徴は、8 世紀初めアフリカからジブラルタル海峡を渡って来たモーロ人がこの地を占領し、以降 500 年にわたってイスラーム教徒が定着、イスラーム

ム文化を根付かせたことである。アンダルシアに花咲いたイスラーム文化はキリスト教にも影響を与え、やがてヨーロッパ文化に強い影響力を及ぼしていったと思われる。

地中海に面したアンダルシア地方は中世ヨーロッパにおける文化的最先進地だったのだ。

グアダルキビル川に近いイタリカはローマ時代から栄え、劇場や住居址が残されている。ローマ帝国が衰亡するとセビーリアはヴァンダル族や西ゴート族に占拠され、8世紀はじめにはイスラーム教徒に占領された。そして13世紀中葉、フェルナンデス3世がアンダルシアを奪還した以降もキリスト教文化とイスラーム文化が融合した独特の文化を創造していくのである。

その事例として、市の中心部にあるカテドラオ（大聖堂）とアルカサルがある。

カテドラオは奥行き128m、幅90mの巨大さでローマのサン・ピエトロ寺院、ロンドンのセント・ポール寺院に次ぐ規模とされていて、西ゴート時代のモスクを壊した跡地に16世紀初頭完成した。完成まで1世紀以上の年月を費やしている。

建物だけでなく聖杯の納室や聖体献示台はルネッサンス様式とゴシック様式が応用されている。あるいはフランシスコ・ゴヤをはじめ、ムリーリョやスルバランなどの絵画もルネッサンス時代の雰囲気の色濃く残しているが、王室礼拝堂（1575）の両側にある「パロスの扉」や「鐘の扉」はゴシック様式の技法が駆使されている。

ナランホス（オレンジの意）パティオ（中庭）もイスラーム建築である。

カテドラオに隣接するビラルダの塔はイスラーム時代のミナレット（尖塔）を利用したもので98mの高さがあるが、内部は階段でなくランプ（傾斜道）で上がるようになっていて、途中に数多くの踊り場がある。これもイスラーム方式。

繊細な装飾はムワッヒド（アルモアデ）朝独自の様式であるがイスラーム建築とキリスト建築の調和が見事というほかない。

塔に登るのは有料であるが展望がよくセビーリアの街が四方一望できるので多くの人がランプを歩いていく。

ビラルダの塔は、12世紀に建てられたときにはモロッコ、マラケシュのクトービヤ寺院、同国ラバトのハッサン塔とイスラーム三姉妹塔であったといわれた。

モスクを壊してカテドラオを造ったとはいえ、キリスト教世界の建築物にイスラーム文化を残し、尊んだ跡を窺い知ることができる。

もう1つはカテドラオの南西部に隣接する「アルカサル」の存在である。

これはイスラーム時代の城をレコンキスタ（国土回復）後にキリスト教徒の王達が改装したものである。

12世紀のアルモアデ朝時代の遺構も残っているが大部分は14世紀中葉のペドロ1世(残

忍王)が、当時カスティーリャに従属していたグラナダ王国のモーロ人職人やスペイン各地のイスラーム職人を呼び寄せて造らせた傑作で、グラナダのアルハンブラ宮殿を彷彿とさせる建築物だ。

漆喰細工の「乙女のパティオ」、ヒマラヤ杉の円形天井のある「大使の間」、彫刻と飾り絨毯、絵画などの「皇帝の広場」はイスラーム、ルネッサンス、近代の諸様式が組み合わせられた芸術空間である。

ペドロ1世に限らず支配者は常に、自分たちの宗教の優位性を示すため破壊と建築を繰り返してきたが、19世紀まで修復が続けられたアルカサルは、イスラーム文化の良さをキリスト教徒がある程度守ってきたことを意味している。宗教間対立は異教徒の芸術まで抹消していない、良い事例かもしれない。

セビーリアの街を貫流しているグアダルキビル川はスペインを流れる5大河川のうち唯一航行可能な河川だ。地中海から船で80km、そこにセビーリアの街がある。

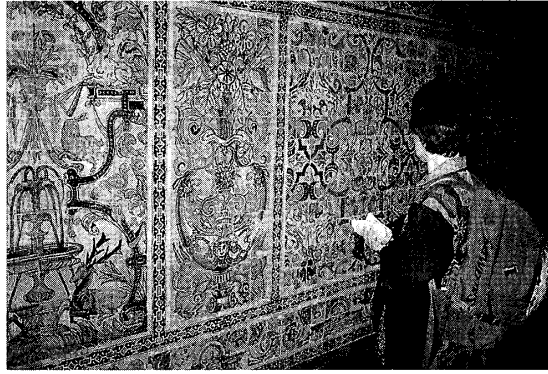
カルタゴの侵入、フェニキア人の襲来などアンダルシア地方に侵攻した外敵は例外無く、この河川を遡上した。また、16世紀船で世界一周に出発しフィリピンで殺されたマゼランもこの川から出発し、マゼラン亡き後一行を連れて帰還した副隊長エルカァノもこの川に戻ってきたのである。

グアダルキビル川に架かるサン・テルモ橋の傍に正12角形の塔がある。13世紀初頭、川船の通行を検問するために建立されたものだが、陶器煉瓦が金色に輝くところから「黄金の塔」などと呼ばれている。対岸には8角形の銀色の塔がある。不審船の侵入に対して2つの塔の間に鎖をかけ船の遡上を防いだものであるが、川の要塞であり城壁の意味を持たせたのだ。

サン・テルモ橋の600m程上流にはイサベル2世橋があり、その間を繋ぐ左岸の道路をクリストーバル・コロ南通りと呼ぶ。

いかにもコロンブスにゆかりのある街を想像するが、イサベラ女王の援助で航海に出た港はいずれもアンダルシア地方西部の街だ。1492年から1498年にかけて。

コロンの第1回目の航海はパロスが出発地で第2回目から4回目まではパロスの東隣のカディスだった。



セビーリアのアルカサル内部、漆喰細工やタイル画はイスラーム文化の象徴。

## 9. コロン（コロンブス）の航海とイスラーム世界

クリストバル・コロンの新大陸発見は誰の知識、何処の国の地図、如何なる宗教世界の天文学や航海術によってなされたのか。コロンに限らず、ガマ、ディアス、ヴェスプッチ、バルボアなど15世紀の終わりから、16世紀の初頭にかけて怒濤の如く行われたヨーロッパキリスト教世界の人々が成し遂げた大航海と世界制覇は、単純に幼稚で誤った地理的知識や科学に裏打ちされた地図を持参して達成できるものではない。

この時期、キリスト教世界が利用していた地図はTOマップと呼ばれる宗教的な模式図で到底科学的とはいえなかった。

中世ヨーロッパ人はエルサレムを真ん中に、一番高い場所は地上の楽園パラダイスが描かれ、東方の陸地にはエデンの園、そこから流れる4本の川などが描かれたのが「キリスト教地誌学」の知識だった。この地図に従ってコロンが航海出来るわけがない。

古代ギリシャの科学、ギリシャ人の知識は中世になってイスラーム教徒、アラブの世界に受け継がれていたのである。

コロンに西廻り航海の可能性を確信させたのは、イスラーム教徒の媒介によってヨーロッパキリスト教世界にもたらされたギリシャ人の知識であったのだ。

ギリシャ人は、地中海世界をくまなく航海し、異質の文化をもつ様々な民族の存在を確信した地中海人だった。BC5世紀ピタゴラス学派が地球球体説を唱え、BC4世紀のプラトンはアトランテス大陸の可能性を示唆した。

アレキサンドロスの遠征でベルシャ湾、インド洋沿岸知識が拡大し、世界は丸くてスペインから西廻りでインドに至る距離は短く、その中間に陸地はないといったことが述べられている。

BC 3 世紀には、エラトステネスが地球の周囲の長さを算定し、世界図を描いた。

地中海地域はかなり正確で詳しい。

紀元 1 世紀、プトレマイオスは著「地理学」を著し、経線・緯線入りの世界地図を作成している。これにはもちろん新大陸は記載されていない。しかし、アフリカのモザンビークやキリマンジャロ、ビクトリア湖、ザンジバルなどが記載されているからアフリカ中部まで、紀元前後の古代ギリシャ人の地理的知識は広がっていた。

7 世紀、イスラーム教徒は地中海沿岸とイベリア半島からヨーロッパに侵入し、強い影響力をキリスト教世界にもたらす。ポルトガルには 8 世紀になってからの侵入だ。

ギリシャ人の地理学的知識はアラビア語に翻訳されヨーロッパ人に伝えられたのだが関心を示すキリスト教世界の人々は少なかった。

関心を示したのは 13 世紀なかごろからイベリア半島や、イタリア半島などイスラーム教徒の影響力の強い地域に限られていた。

大航海時代が始まるより 2 世紀も前の 14 世紀、ポルトガル・イタリア合同船隊がカナリア諸島やアゾレス諸島まで達しているといわれ、ジェノバ人はアフリカ南端を廻ってインドに達しようと大西洋に乗り出している。(大航海時代叢書)

コロンはジェノバ人、アメリゴはフィレンツ人であったことを考えれば、彼らがイスラーム教徒を介してギリシャの地理学を伝達されていたとしても無理はない。

コロンやアメリゴが世界に飛躍するため支援をうけたスペインやポルトガルもまたイスラーム文化が支配的な時代があり、少なくともイスラーム教徒からのレコンキスタ（国土回復）期まではキリスト教徒がイスラーム教徒から科学的地理学知識を学んだことは間違いないし、コロンの息子の証言によると「親父の使った地図はアラブの地理学者アルファヌガヌスのものだった」のである。(飯塚浩二)

ところが、キリスト教世界の航海者、探検家は滑稽なまでに「大航海の基礎的知識・科学はキリスト教世界のもの」といったポーズをとり続けるのだ。つまり、ルネッサンス以降のヨーロッパ人の非キリスト教世界にたいする蔑視、イスラームに対する没価値的相対観が増幅されていったことになる。

大航海時代からのキリスト教世界の侵略、征服、略奪は、非キリスト教文化地域というだけで低次なもの、野蛮なものともみなし、いやしみ、抹殺することで世界の秩序が形成されてきた。

大航海時代の探検者達は、結果として少なからず世界の間人社会の関係、文化的視点、民族的な基準を今日的状況に置き変える一定の役割を果たしたといえるであろう。

こんな歴史の舞台となった地域を貫流する、氾濫と水害で知られるグアダルキビル川も

最近は上流の一部を運河として改修している。

今は川面に軽装のカヌー遊びの光景が見られる程度だ。



職場を定年退職後、コスタ・デル・ソルの中心都市マラガで暮らすトマス・ゲーリン氏。

## 10, コスタ・デル・ソルのマラガ

セビーリアの街からマラガのトマス・ゲーリン名誉教授宅に電話を入れた。「ジブラルタル海峡のアルヘシラスに行く途中であるが、暇があればワインでも飲みたい」と。

マラガは通り道だ。一泊宿泊することにしたのである。

ゲーリン氏はアメリカコロラド州の出身であるが、定年後取りあえず3年契約でマラガのマンションを借用し、移住した。その後は状況を見て延長するかどうか、決めるということであった。

セビーリアの街を出たバスは南下する。波状丘陵が続き、オリーブ畑と葡萄畑が続くがたまに小麦畑も展開する。単調な土地利用景観だ。

団扇サボテンが家の垣根や農地の境界線に使われている。乾燥地帯であることの証明だ。菜の花が雑草化して道路の両端を黄色に染めている。

ペニベティカ山脈の鞍部を通過するが、石灰岩の硬い部分が浸食から取り残されケスタ地形になっている。

剥きだしになった露岩状況で白い岩肌がいかに南国を思わせる。

無料の高速自動車道は120km制限になっている。アメリカのフリーウェイが65マイル(110km)だからスピードを感じ、窓からの写真撮影など無理である。

唯、眼を皿のようにして車窓から外を眺める。

山脈を越えると道路は急なヘアピンカーブを繰り返しながら一気にマラガに向かって下っていくのだ。

白い壁、茶褐色ともオレンジ色とも言える屋根、快い海風、コスタ・デル・ソルの雰囲気



気が充滿している。小高い丘の建物は、明らかに高級リゾートの別荘地だ。

セビーリアから2時間20分でマラガに着いた。

トマス・ゲーリン夫妻がバスターミナルで出迎えてくれた。1ヶ年ぶりの再会だった。

日本人国籍を有するゲーリン夫妻がスペインの滞在ビザ取得に3ヶ月の日程を要したという。最近日本人の定年退職者が海外に移住する傾向は強まっている。しかし、移住は旅行とは違う。手続きはかなり複雑で面倒らしい。

スペインでも高級避寒地として知られるコスタ・デル・ソルのマラガだけに審査手続きも困難を極めたという。東京の領事館等を駆けめぐって滞在ビザを手に入れ、街のダウンタウンに近い、また地中海の浜辺にも歩いていけるロケーションにマンションを借用したのである。

「年金で十分生活出来ますよ」と夫妻は言って、マラガの生活をエンジョイしている様子だった。

マラガ・アンダルシア通りのワイン店は何種類もの大樽から栓抜き蛇口を通してグラスに注ぎ、土間で立ち飲みする倉庫風レストランで、コクのある美味の樽ワインを数杯飲むことから夫妻の案内するエクスカーションが始まった。

樽の置かれている内側には黒ズボンに白服の老紳士が、もう1人は息子と思われる同じ服装の若者がコップ大の大きさのグラスに入れて樽出しワインを客に振る舞う。カウンターで飲むたびに小銭を支払う方式である。天井からは裸電球が下がっている。10人位の客がいた。日本でいう「一杯引っかけた帰路に着く」感じだ。カウンターの天板がワイン色に染まった大理石でグラスを置くに<sup>つか</sup>気遣いが必要だった。大樽の数も20本以上は積み上げてある。従って種類も20種以上あるということ。

樽には「コセチャ1883」、「パジャレーテ」、「グインダ」など銘柄がそれぞれ示されている。

アルメデア・プリンスパル通りの港湾近くにマリーナ広場があり、臨時のテントで「南米の物産展」をおこなっていた。

スペインはブラジルを除く南米諸国に植民地を統治していた時代があり、今でも経済的な絆は強いから、その関係で南米の特産品が並べられ即売されている。

ペルーの楽器ケーナ、木彫りの面、宝石のネックレスやチリの銅製品などインデオやメスチーソの製作した品々が眼を引いた。

ペルーのケーナやギターはアンデスのケチュア族やアイマラ族のfolkloreには欠かせないし、チリにはチュキカマタ、エル・テニエンテ、ポトレリジョスなど有名銅山があり銅製品が多いから、それを宣伝するための市である。どういうわけかブラジルからは

マンゴ、パパイヤ、コーヒー、砂糖など農産物とメロンやバナナ、パパイヤ、マンゴの乾燥果実が出品されていた。

トマス・ゲーリン夫妻は定年後の居住地にマラガを選んだ理由として、単にコスタ・デル・ソルの海浜リゾートとしての価値を考えて移住したのではなく、ピカソ美術館、マラガ美術館、人形の家博物館や民族博物館など豊富な展示スペースで美術・芸術が味わえる魅力、カテドラオやサンティアゴ教会、礼拝堂にみる各種宗教施設と宗教行事、城郭や要塞などの遺産、加えて毎日のように催される音楽会や演劇、舞踏芸術などアンダルシア地方が持っている文化遺産の集中地区という魅力に惹かれたという。毎日が遺産を観て、行事をこなす、尚かつ夫妻でスペイン語講座にも通っているというのだ。

最初、案内されたのは旧市街のランドマーク「片腕のカテドラオ」である。16世紀に建築が始まったが途中資金不足で右側の塔が完成しなかったので片腕しかないというのである。ゴシック、ルネッサンス、バロックの建築様式が取り込まれ、ロサリオ礼拝堂にはアロンソ・カーロの油絵「ロサリオ聖母」が飾られている。礼拝堂にスペイン市民戦争で虐殺された犠牲者の遺骸がおさめられているのだという。

圧巻は、ペドロ・デ・メナの傑作、油絵の「悲しみの聖母マリア」であるが、多くの教会絵や宗教絵画は大抵聖書の物語が題材になっているから、聖書を理解している人々は絵の内容が分かりやすいのだ。

ピカソは1881年、マラガに生まれ、10歳までの幼少期をマラガで過ごしたから、メルセー広場に生家がある。

広場に面したビルの1階、ごく普通の店のなかに陶器や写真、父親の描いた油絵などが残されていた。

カテドラオの近くにピカソ美術館があるが、これは16世紀のブエナ・ビスタ宮殿を改修した跡地に2003年オープンしたもので新しい。

ピカソの絵の外、息子の未亡人クリスティーヌ・ルイス・ピカソや孫ベルナルド・ルイス・ピカソの絵など200点以上がある。

市はピカソの生誕地マラガをもっとアピールする必要に迫られて、イベントや行事を考えているという。ピカソは14歳以後の青春時代をカタルーニア地方のバルセロナで過ごし大半の作品は、この街の「ピカソ美術館」にあり、後半期の大作「ゲルニカ」はマドリッドの「ソフィア王妃芸術センター」にあって、幼少期マラガで生活したことはあまり知られていないからだ。

サンティアゴ教会も案内してくれた。ちょうどミサの時間で無料だ。普段、見学者、観覧者からは入場料を取っている。

18世紀に改修した際、内部は壊されたがゴシック、ムデハル様式の塔が残存している。ピカソが洗礼を受け、ピカソの両親が結婚式をあげた教会だ。

ゲーリン氏によると、最近の傾向として若者の教会離れが進んでいる。バラの花を教会の内部に置き、賛美歌演奏をオルガンからギターに変えているのは若者を引きつける手段だという。

夕方6時はミサの時間帯だった。ミサの最中、シスターのような服装をした女性が籠をもって寄付を仰いで歩いている。彼女たちは教会の掃除婦だとのこと。教会入り口には年老いた物貰いの婦人が佇んでいた。

マルケス・デ・ラリオス通りを南に歩いて都心にあるゲーリン氏のマンションに到着した。

ビルの2階で、ベッドルームとダイニングルーム、キッチンと洗面所のこぢんまりした佇まい。家具調度品はもちろん、皿、スプーンなど台所用品一式ついて月6万円の家賃だから高くはないという。

パーティーは特性のシャンパンとワイン、地元産のエビ、ムール貝の茹でもの、ベーコンとパン、果物など食卓に並んだ。

話題は、もっぱら海外移住の楽しさ、海外で暮らすノウハウ。コスタ・デル・ソルの自然条件と文化遺産、移住してからの旅の場所、定年退職後の論文書き、闘牛の文化的意味、スペイン人の音楽や美術などの文化理解力の深さ、病気になったが医療保険に入っていたから医療費はかからなかったこと、などだったが、退職後の年金で楽しい海外移住が出来る確信を持てた。

海外移住は、日本人の誰もが老後の暮らし方の1つの選択肢として夢見るが、情報は本やTVであって実感として伝わりにくい。当事者の生活実態を観ることが何よりの情報だ。

夜遅く、ゲーリン夫妻は私たちをホテルに送ってくれた。ホテル・ベネシアは、ゲーリン夫妻が我々の条件に基づいて探してくれた。この街最大のアラメダ・プリンシパル通りに面していたが、部屋は広く清潔で快適だった。

## 11, アルヘシラスとジブラルタル

コスタ・デル・ソルはイベリア半島の南部、アンダルシア地方のマラガ県、グラナダ県、アルメリア県に跨る400km余りの地中海沿岸で、日本では「太陽の海岸」と訳されているように、冬は温暖(12度C)で雨があり、夏は暑く(26度C)寡雨になる海岸だ。

マラガから東はアルメリアまで、西はジブラルタル海峡のタリファまで各200kmの距

離があり熱帯植物栽培に適した地域である一方、中部、北ヨーロッパ人の避寒地ないし海水浴場として古くから、そして最近は急速に別荘地化、リゾート地化が進んでいる土地でもある。

海岸線に沿って国道340号線が走っているが、国道の海岸よりの岩石海岸や砂浜海岸は白亜の建物が連続し、埋め尽くされている感じだ。

海岸線の北側はシエラ・ネバダ山脈（最高で標高3500m）やシエラ・デ・ロンダ山脈（最高標高2000m）が急崖をなして海に迫るが、国道の北側、陸側の斜面にも続々と新しい住宅群、ホテル、巨大なマンションが建築中である。

これまでは中部ヨーロッパや北ヨーロッパに住む人々が中心だったが、これからは経済成長の著しい中国をはじめ、アジア人のリゾート地になるのではないかともいわれている。

比較的平地の多いアルメリア地方は野菜や果物を温室で栽培するほかサトウキビの栽培も行われている。

太陽海岸の明媚な光景の中であって、レコンキスタ後アフリカからベルベル人の攻撃に備えて建造された「モーロ人の塔」の遺構が点々と見える。

海岸線の向こうにアフリカ大陸モロッコの島影が、アルヘシラスに近づくに従って濃く、大きく見える。

マラガでゲーリン夫妻に見送られたバスは海岸線に沿う200kmの道を走り、2時間半でジブラルタル海峡沿いスペイン側の都市、人口10万人アルヘシラスに到着した。

海を挟んで東側にイギリス領ジブラルタルがある。

ジブラルタルは細長い半島状の地域でスペインの王位継承戦争の間にイギリス軍が占領し、1713年のユトレヒト条約で統治権が与えられたから英語の看板の多い街だ。

どこからでも眺望できる標高426mのターリク山は急峻な岩盤が天を突き刺すように聳えているジブラルタル象徴の山塊である。

山麓は4~5階建ての白亜のリゾート風建物で埋まっている。ゴルフ場もある。

人口3万人弱のイギリス領ジブラルタルに比べ、対岸スペイン側アルヘシラスは大きな都市である。

8世紀から14世紀までモーロ人の支配下にあったことでアラビア語の地名が多い。

3月中旬というのに汗ばむ夏日の気温である。

バスターミナルからフェリーターミナルに重い荷物を曳いて15分歩く。汗びっしょりになる。真夏の暑さなら汗になる前に蒸発して汗ばむことは無いのであるが、3月はまだ雨期、湿気が強い。

途中、客引きがいて個人経営の旅行社が並ぶ店に連れ込まれアルヘシラスからアフリカ

のタンジェ行き（ジブラルタル海峡渡航船）高速船の切符を買った。買ったと言うより買わされたのである。公式の券売所が分からなかったからだ。

そこから歩いて10分、フェリーターミナルにつくと時間に遅れて乗船ゲートがクローズ。次の船は高速船ではなく、フェリーであるから切符を買い直して来い、といわれる。

10分歩いてチケットを買った店に戻ると、シエスタで店はシャッターを下ろしている。これは計算外、ようやく同じ店の支店がターミナル内に開いているかもしれない、との情報を得て走って切符を取り替えた。

船は「コマナフ号」で1000トンくらいのものであったがチケットにはアラビア語、フランス語、英語の3ヶ国語の表示があった。

高速船からフェリーに替えたことで時間は3時間半と、高速船より1時間以上かかるがジブラルタル海峡横断のゆっくりした旅がいいに決まっている。

この付近はイベリア半島側カディス、アルヘシラス、ジブラルタルからアフリカ側のタンジェ、スペイン領セウタなどに1日各1~2本の船が出ている程度なので乗り遅れると厳しいことになる。

船が地中海に出ていくと、もうすぐ先にアフリカ大陸が見える。最短で僅か13kmのジブラルタル海峡は狭い。だが陸地間の海、ヨーロッパ地中海は豪亜地中海やアメリカ地中海に比べれば小さいとはいえ300万平方キロメートルあり、日本の総面積の8倍もある。海峡は巨大な地中海の大西洋への出口である。

この狭い海峡は歴史上さまざまな出来事を見つめてきたのである。

エジプト、シリア、フェニキア、ギリシャ、そしてローマと担い手は入れ替わっても商業活動の舞台になり、キリスト教世界がいう蛮族侵入からルネッサンスまでの中世、アルプスの北方が停滞ないし暗黒の時代も、もっぱら地中海地域が既知の世界の拡大を推進し続けた、との考え方に立つ。「既知」の言い回しはルジャンドルの「海の発見」（クセジュ文庫）によるが“中世前半はまた、スカンディナヴィア人やアラビア人の諸航海によって既知の世界が拡大された時代であった”から引用しており「未知」ではない。

このなかには、アラビア人は東方において、地中海社会とは異なるインド及びシナの人種、習俗、宗教及び文明を明らかにした、とあり、キリスト教世界の新航路、新大陸発見に先駆けること5世紀とも書いている。

ルネッサンス以前、地中海を出て、紅海、ペルシャ湾、インド洋からマラッカ海峡に到達して商業活動を展開していたのはアラブ人であり、イスラーム文化の担い手たちだったのである。

飯塚浩二は著「西洋史と東洋史のあいだ」で、「尺度となるべきは、その当時なりに世界的な性格をもっていた文化、つまりここではイスラーム文化の側でいいはずである。にもかかわらず、かえって田舎文化の側、旧ローマ帝国属領のヨーロッパの部分に腰をすえるにいたった蛮族の側の方が尺度とされている」と述べる。

アラビア人の業績に最後の仕上げをしたのはヨーロッパ人という言い方ならわかる。大航海はキリスト教世界の発見と短絡的にいうのは危険だ。

アフリカ大陸モロッコの玄関タンジェはイベリア半島から直線で僅かな距離の場所にあるが、ここはアラブの世界である。羊肉の串焼きのシシカバブの臭い、フードのついたイスラーム教徒服ジュラバ、顔を布で覆う女性の姿がある。

敵の侵入を防ぐためのメディナ（旧市街）と呼ばれる迷路街路と厚い城壁、香辛料などや伝統的工芸品を売るスーク（市場）など、アラブの世界を実感させる光景に出会える。

かつての栄華は消えてしまったのではないかと思われるオンボロホテルコンチネンタルはメディナ城壁の内外に渡って建造されているが、近くのアッサ門を出ると小高い丘、地中海を望み遙かイベリア半島のタリファ岬が見える。こんなに近いのかアフリカ大陸とヨーロッパ大陸は、といった実感が迫ってくる。

## 12. ジブラルタル海峡圏南域

中南米の宗主国はスペイン、ポルトガルだった。両国の支配は属領だった国々が独立した後でも言語や宗教、民族や生活習慣に宗主国文化を色濃く残した。中南米支配では16世紀以降、先住民族などとの摩擦や葛藤があったが、白地図に色を塗るような鮮明な着色、文化支配が行われたと見ることも出来る。

アフリカ諸国も宗主国と属領の関係はストレートに行われた地域もあったが、時代の経過のなかで複数国が葛藤した跡を残すような文化融合が進んだ地域もあった。

ヨーロッパ大陸に近いマグレブ諸国は地中海を挟んでいる地理的環境から列強の度重なる支配と戦乱に巻き込まれたため破壊された遺産、残った遺産、複数の支配国の文化的特徴が残った部分もある。

マグレブ諸国の1つモロッコは、先住民族ベルベル人居住地域であったがBC5世紀にはカルタゴの支配地になり、その後ローマ、西ゴート族、アラブ人などの支配が続く。

ヨーロッパではキリスト教徒によるレコンキスタ（国土回復運動）が起るとスペインのアンダルシアからアラブ人がモロッコに避難、それを追ってキリスト教徒もモロッコに

渡り、支配地を拡大したのである。

16世紀中頃からポルトガルやスペインが北アフリカ西部に侵入し、19世紀にはフランスが登場、ジブラルタル海峡圏南域はヨーロッパ列強の争いに巻き込まれる。ベルベル人、アラブ人等に加えてポルトガル人、スペイン人、フランス人などが移住し、混住社会が形成されるが本国と入植者の二重支配を受ける人々も顕われた。

20世紀のはじめから民族自決、モロッコ人の政治的地位向上を求めた独立運動が高まって第二次大戦後独立する経過を辿る。

こうした歴史的経過と地理的位置との相関がモロッコの国民性や文化的融合に少なからず影響を与えているのである。

特に20世紀はじめ、モロッコはフェス条約でフランスの保護国となり、フランス・スペイン条約でスペインの支配も許し、ジブラルタル海峡に近いタンジェは23年間も国際管理下に置かれた。

防戦に回ったモロッコ軍の大砲群は今日なお、タンジェ海岸の海食涯の上に放置されたままだ。

### 13, イスラーム教とアラビックのモロッコ

モロッコはアフリカ大陸西北端にあり、「西方の王国」を意味する「マラケシュ」からきていて、ヨーロッパ人がつけた名称だという。(私市正年「モロッコの歴史と文化」)

マラケシュはカサブランカの南部に位置する人口80万人都市で、モロッコではカサブランカ(300万人)、首都ラバト(160万人)、フェス(95万人)に次ぐ都市。現在はメディナ観光や各王朝の宮殿、墳墓群等史跡で名高い。

モロッコの先住民はベルベル人で、この民族はBC 3000年頃からモロッコだけでなくアトラス山脈の北側のアルジェリアからチュニジアの地中海沿岸に広く住み着いていた。

ベルベルとは古代ローマ人がローマ文明に属さない野蛮な民を名指して呼んだものと私市はいうが、以降ヨーロッパ大陸の国々から幾度となく侵略や征服が繰り返される。

フェニキア人が地中海沿岸のチュニジアにカルタゴ王国をつくって影響力はギニア湾岸に及んだがポエニ戦争(BC 3)でローマ帝国が勝利するとモロッコはローマの支配下に入る。

5世紀にはゲルマン系のゴート族の支配を受け、7世紀末にはアラビア人が侵入した。

ベルベル帝国が出来たのは11世紀、キリスト教やユダヤ教の流れを断ち切ってイスラーム本流の流れをつくり、以降ベルベル族が核になったマリーン王朝が出来てアラビア

語が普及しはじめる。

学校教育の中でもイスラーム教とアラビア語教育が熱心におこなわれたのだ。

しかし、19世紀初め頃から産業革命が進行してきた西欧列強が市場を求めてモロッコ支配にやってくる。

1912年フランスが保護領とするが、直轄植民地ではなかった。イスラーム信仰やアラビア語は制限されたが廃絶されるほどの影響はなかった。教育はフランス語中心に進められたがアラビア語やベルベル語は生き残ることが出来たのである。

半世紀後の1957年独立を達成し、母国語アラビア語やベルベル語が完全復活し、公用語はアラビア語としたがフランス語の影響力はいまだに強い。

モロッコにはメディナで有名なフェスやメクネス、マラケシュだけでなくカサブランカやタンジェなど多くの街に迷路市街区があり、一旦迷い込んだら元に戻るのが難しい。だからガイドをつける必要がある。

このガイドにも政府が認証したガバメントガイドと民間の観光業者協会が運用するツーリストガイドがある。後者は、案内途中新たにガイド料金を付け加えたり、仲間と思われる人々と話し込んだり、途中案内をやめて戻ったりでクレームが絶えない。従って、政府が認証するガイドを頼めば安心か。

もう1つは英語の良くできるガイドであること。かれらは英語のほかスペイン語、フランス語、アラビア語、イタリア語を話すといっても案内に必要な型どおりの言葉は喋るが学問的な背景があるわけではないから、込みいった質問やテクニカルタームにも応じられない。

わたしのガイドはシデー・カセム駅からフェス方面に行く列車に乗り込んできたシェル系石油精製会社のエンジニアと自称するアリという50歳前後の男が紹介した人物。身分証明書を見せて「わたしは友人にイギリス人技術者がいて英語をはなすのだ。子供の写真を見せて家族4人であることをいい、会社のあるシデー・カセムと自宅のあるフェスの間1時間45分を一等車で毎日通勤している。労働時間は1日5時間、勤務は8時30分から13時30分までだ。だから家に帰って子供と遊ぶ時間がある。フェスのホテル（一泊4000円で指定）と、ガバメントガイド（1日1500円）を紹介してやろう」といって早速コンパートメントのなかで携帯電話を取り出して連絡を取る。

フェスのメディナについて話を聞いている内に、私の方から宿とガイドの件を切り出したからである。

「宿はフェス駅前と比較的安価なホテル、誘導する人が紙に「SHINDOH」と書いて待



ち頭上に掲げているからその指示に従え。ガイドは翌朝8時半ホテルのフロントに来ている、と。午後2時まででガイド料は1500円、タクシー代と昼飯代は客持ち、もちろんガバメントガイドだ。日本語の通訳、ガイドはいると思うが知らない」と付け加えた。

それにしても出来すぎている。毎日一等車で通勤するエンジニアの男がこんなに我々の要求に手際良く応えてくる。何かおかしいと疑いつつも大きな損失はあるまい、と決め込んでアリという男の言い分に従った。

フェスの駅に「SHINDOH」と書いた紙を高く掲げていた男が立っている。ホテルの従業員であると確認してついていく。駅と宿は歩いて5分くらいのところにあった。宿は小綺麗で「パエーラ」と名前があり5階建ての2つ星クラスのものだった。

ホテルには英語を話す女性のフロントがいた。2つ星程度の宿には英語の出来るフロントマンはいないのが普通である。ここはアラビア語とフランス語の世界だ。

カサブランカの銀行に換金に出かけたところ「この国に来て英語を話すな。アラビックかフレンチを使え」と英語で怒鳴られる。40年ほど前のフランスには似た状況があって英語を知っているのにフランス語で話させる風潮があった。今のフランスは、はるかに英語が通じる。

#### 14, 寒いと思えばそこは東京の緯度

05年3月の沖縄が異常気象で例年になく寒さに見舞われていた。ほつほつ海水浴の季節になり海開きを4月に控えているというのに、日中の気温が10度C前後だ。短パンやら半袖を揃えて出かけ、寒さへの対応を怠ったため結局は沖縄で冬物を購入することになった。沖縄の住民でさえ異常に寒いと凍えていた。リゾート調のホテルに暖房機が備え付けてあるのも知らず、レンタカーの中で暖をとったりしていた。

だが、沖縄は東京と比べ緯度が10度も低い。だから異常気象とっていいがモロッコの緯度は東京周辺に近い。3月の寒さは東京に似ていても珍しいことではないが、ヨーロッパ南部の温暖性から類推して暖かくていい筈だ。

3月のポルトガル、スペイン、モロッコも寒かった。沖縄の教訓があったから冬物のアノラックなどを用意して丁度よかった。

緯度からいえばリスボンが秋田か山形付近、カサブランカは東京付近だ。しかし、大陸東岸と違ってこちらは西岸海洋性気候である。春の寒さも東岸ほどのことは無かろうと推測するのが普通だ。

ポルトガルのリスボンも、地中海のジブラルタルも、モロッコのカサブランカもオー

バーコートなど厚着の冬支度の人々で溢れていた。しかし雪はない。

同じ3月のロンドンも同様の気候だ。ここは緯度52度だから日本など大陸東岸でいえばサハリンの北部に属するから無理もない。

ユーラシア大陸の東西を比較してみると、温帯の気候は西海岸でいえば北緯30度のモロッコあたりから北緯70度近いノルウェー北部に及んでいるが東海岸では北回帰線のあたる台湾から北緯40度の秋田、青森あたりの狭い範囲に限定されている。

緯度幅でいえば西海岸では40度、東海岸では27度の範囲に温帯気候があることになる。この緯度幅は日本列島の九州南端から北海道の北部の距離に匹敵する距離である。

ヨーロッパの気候が海岸から内陸に向かって絨毯を敷くように変化するのに対して、東海岸は南から北に敷くような感じなのだ。

札幌と鹿児島的气温差は大きいがかサブランカとロンドンの気温差は緯度ほどにないということである。

北大西洋海流が強く北緯70度でも不凍港が存在するスカンディナヴィア半島、北緯45度でも海水、流水が港湾を埋め尽くし船の航行ができないオホーツク海沿岸との違いが明瞭になる。

沖縄でも異常気象があつて3月でも真冬より寒い状況が出現するのであるから、外国の気象状況は想像を超える場合がある。

## 15. 交通機関としての列車

ヨーロッパは列車の発達が著しい。幾つもの国を越えてゆく国際列車の運行がごく普通だ。以前は国境を越えるたびに国境検問官が汽車の中で乗客のパスポートなどの検閲をおこなっていたが、EU統合少し前から、イミグレーターを見かけることもなくなった。

ユーレイルパスという鉄道切符の各国共通券があつて各人の母国で購入すれば何日間も比較的格安に利用できる。

鉄道幅が広軌でスピードもあり、1等、2等ともコンパートメント（6人用個室）に仕切られているケースが多く、座席も広い。

発車・到着時間も正確で、ニュージーランドのように1時間程度の遅れは普通といったことは滅多にない。

マドリード（スペイン）やポルト、コインブラ、リスボン（ポルトガル）、タンジェ、フェス、カサブランカ（モロッコ）など英語圏ではないが、英語の通じる駅員が切符を販売しているから駅でまごつくことはない。

都市間を結ぶ定期バスも時間は正確であり鉄道線路の不便なところはバスが代用している。例えばポルトガルのリスボンからスペインのセビーリア、そしてジブラルタルまで鉄路はない。

何処の街にも大きなバスターミナルが整備されていて人々の移動拠点になっている。ヨーロッパの西端とアフリカを結ぶジブラルタル海峡は連絡船並にフェリーや高速船が運航している。ヨーロッパ側のカディス、アルヘシラス、イギリス領ジブラルタルとアフリカ側タンジェやスペイン領セウタに向かい船が出る。

大型フェリーで2時間半、高速船で1時間程度の船旅であるから4時間半のかつての青函連絡船よりもかなり短い。

フェリーの排水トン数は大きいが国境を越える船につきものの免税店コーナーはない。1000トン以上と思われるフェリーに30人程度の乗客しか乗り込まない場合もある。

乗り物で問題なのはタクシーである。スペインやポルトガルはメーターが設置されていて乗車料金が明示されるがモロッコは滅多にメーター付きのタクシーにお目にかからない。

乗車前から料金交渉の必要があるが初めての土地では遠近の見当が掴めない。

案内書には「カサブランカ駅前のタクシーはぼるよ」と書いている。ホテルを指定したのが運転手が「いいホテルがある」というので行ってみた。タクシー代は600円だ。ホテルのフロントで汽車の駅までのタクシー代は130円という。600円は日本では1区間分だから高いとは思わないが、比較するとぼられた感じになる。

その後、モロッコでのタクシー代は徹底した交渉の後、乗車することにした。駅や観光地で客待ちしているタクシーにぼるタイプが多い。

英語の通じないタクシー運転手が多いだけに交渉ごとは慎重に、十分時間をとっておこなわないとトラブルの結果、損するのは客側である。

## 16, モスクとメデイナの世界

ジブラルタル海峡は単にヨーロッパ大陸とアフリカ大陸の狭い境界であるだけでなくキリスト教世界とイスラーム教世界を分ける境界線でもあると思われた。

表面的には境界線であるが、スペインのアンダルシア地方には多くのイスラーム遺跡やモスクがあり海峡が障壁になっているとはいいいにくい。

海峡に面するタンジェはギリシャ神話によるとポセイドンの息子の「出逢う者」を意味するアンタイオスがテイングリスの町（タンジェ）を建設したとなっていて地名の発祥につながった。

タンジェは14世紀中頃、西アジア、インド、中国、北アフリカを調査して「三大陸周遊記」の口述者としてのイブン・バトゥータ生誕の地で知られているのだ。墓もこの街のメディナのなかにある。

スペインにもっとも近いモロッコの街タンジェ、船を降り宿を探した。フランス語とアラビア語以外通じにくいので電話予約ができない。港に近い丘の上に見えるコンチネンタルホテルにタクシーを横づけ、フロントと宿泊交渉した。そこはメディナ（旧市街）の入り口であり、ホテルの正面はメディナの外、裏口からはメディナの内部に出られる。

アラビア語のメディナは「都市」を意味する低い城郭に囲まれた迷宮都市である。

狭い迷路のような枝分かれした路地が交錯していて、歩いていても方向感覚が失われるような世界。薄暗いトンネルもあれば行き止まりの袋小路もある。城門を出ると海蝕崖の上に出る。ジブラルタル海峡に向けて4基の巨大な大砲が並ぶ。こうした大砲はいたるところにその残骸を残していた。

タンジェはモロッコにアラブ人が侵入してきて以降、造られたものだから7世紀頃になる。

タンジェは古くから戦略上の要衝であったことは地政学的にみてもすぐ理解できる。

ジブラルタル海峡に面するタンジェ駅からアルジェリア国境のウジダ行き列車に乗り、フェスに行く。

翌朝8時半、時間にきっちりガイド兼通訳のモハマドはホテルにやってきた。公認ガイドの証明書と案内条件を確認し、タクシーでフェスのメディナに向かったのである。

しかし、モハマドは案内時間は正味4時間、あと2時間は昼飯時間だという。昼飯は自分で勝手に食べるから案内時間を6時間にするか、4時間分の案内料に減額するか交渉したが「契約の条件内」といって聞き入れない。モハマドを6時間拘束して1500円（観光案内書では2700円）だから、高いとは言えず従った。

彼は英語、イタリア語、スペイン語、フランス語で案内してきている、という。

フェス駅前のホテル「ピエーラ」からタクシーで15分位（200円）でフェス・エル・ジュディド地区の王宮に着き、正門で説明を開始する。中には入れない。

11世紀以降スンニ派イスラーム王朝が使用していた居城で、今日のモロッコ王も別荘地として利用している、等説明してからメディナ入り口に当たるブー・ジュールド門に向かった。

20世紀初頭に建設されたイスラーム特有の幾何学模様のタイルが貼り付けられ、彫刻が施されているフェス最大の門である。ここより先、メディナには車は乗り入れられない。

歩くかロバや馬を利用する以外ないのだ。

メディナの外には青空スーク（市場）やカスバ（要塞や砦であるが地域によっては領主の城や館）が見える。カスバはメディナ内にもあった。

ブー・ジュールド門を潜り、城壁の中に入ると狭い小路が限りなく枝分かれしていてガイドがいなければ直ぐにラビリンス（迷路）に迷い込んでしまいそう。ガイドがいたって方向感覚は掴めない。コンパスなど訳に立たない。荷物を積んだロバ、人の乗った馬、4～5頭紐で繋がれ移動してくるラバが通りすぎる。その都度通行人は壁にへばりついて家畜の通り過ぎるのを待つ。小路の両側は壁あり、商店街あり、住宅ありで整然としていない。行き止まりの小路があり、薄暗いトンネルもあるが、標識はない。小路の数が380通りあるといわれているが、観光コースは西側のブー・ジュールド門から奥まったところ東側にあるサファリーン広場を回ってやや南側の道を元に戻る800m位だ。

通過する家畜の糞や尿で強烈な臭いが立ちこめている。魚屋、肉屋、野菜販売店、パンや日用雑貨、絹や羊毛製品、金属製茶器やジュータンの店、皮革製品、カバブを焼く店などありとあらゆる物が売られているし、カフェやホテルもある。メディナを一步も出ないで日常生活が出来るよう工夫されているのである。しかも外敵の侵入を防ぐ精巧な構造になっている。

モハマドは場所を説明する英語は知っているが質問には答えられない。ガイドとしてはいささか知識不足だった。

モハマドは前半はモスク中心に、後半は商店街を案内した。後半の案内はもちろんジュータン、皮製品、衣料品、金属製品など店と結託して観光客に売りつける商法だ。

前半は、タラアア・ケビーラ通りで14世紀ブー・イナニア王によって建てられたマリーン朝最大の神学校「ブー・イナニア・マドラサ」の彫刻やタイルモザイク建築物の案内。入場料は支払えと押しつけてくる。

東端までシェッラピリン通りを歩いて香料、香辛料、香水を売る店の集まったアツタリーン・スーク（市場）を見せる。織物や絹製品のスークもある。

コーヒーや茶（ミントティーといって緑茶にミントの葉を沢山入れ、砂糖を入れて飲ませる）を小路の隅に置かれたテーブルで飲んでいる人々がいる。茶やコーヒーを入れるポットの多くはこのメディナ内で職人によって造られているし、銀食器などはモロッコを代表する土産品でもある。銀や錫、ステンレスなどが材料だ。道端の野天カフェーなどでお酒を飲んでいる人にはお目にかかれない。お酒は法度である。

皮革や布の染色所は何処のメディナにもある。革製品を売る店の3階屋上から染色の情景を眺めた。



蜂の巣のような桶は染色用剤が貯えてある。フェスのメディナにはいくつもある。

直径2 m ほどのコンクリート製の円く深い桶が蜂の巣のように立ち並ぶ。その1つ1つには染色用剤がはいっている。赤はポピー、黄色はサフラン、青はインデコの石を砕いたもの、緑はミント（茶のミントとは異なる）、黒はマスカラ、グレーはアンチモンと鳩の糞、オレンジはヘンナを使う。

大勢の染め物労働者が獣皮の染色に手作業で取り組んでいる。見ている方は伝統工芸の製作者達の姿に映じるが、色とりどりのコンクリート桶内の染料と闘う労働者はパンツとランニングシャツで染色剤に濡れまみれて、重労働に思われた。

ブレザー姿の現場監督者あるいは指導者も何人かいる。染色された皮革は天日に干されているが小鳥の糞など使っているため悪臭が鼻を突く。壁側には、昼前染色した羊皮が数十枚の単位で干してある。ここから発散する腐り物のような臭いも強烈であった。密集したメディナのなかはコールドチェーンシステムのない肉屋の匂い、香辛料売り場の匂い、小路のラバや馬の糞の匂い、レストランや人間の体臭からくる匂いが重なって異様な匂いを醸し出している。

物貰いの人々も眼につく。眼の見えない人、手足の不自由な人々に多い。

足だけが覗き、白布を被せた遺体を担架に乗せて数人で担ぎ去る。小路の両側の商店主達が飛び出してきた手を合わせている。共同社会の光景だ。

フェス・エル・バリといわれるモロッコ最大のメディナは南北を流れるフェス川を中心に西側と東側の緩やかな斜面に形成された集落だから起伏があり、坂や階段が至るところに存在し立体的にさえ感じる。街全体がすり鉢状で尾根や谷を上手く利用しており、近代化した町並みとはいささか異なる迷路都市だ。

人間の道理や地の利を曲げずに、自然の条理に逆らわず、自然発生的に小路や家屋が出来ていったのでないか。

小路を南に行くと、フェス川に近いカラウイン・モスクに出る。

このモスクは9世紀に建てられ、10世紀初頭大改造されたフェス最大のモスクだ。

スペイン、コルドバのウマイヤ朝様式とペルシャ様式の要素を組み合わせ、融合させた建造物で、中庭はアルハンブラ宮殿にある獅子のパテオを模したもの。大理石の柱に支えられた泉がある。

モロッコ文化がスペインやペルシャから学んだ証明のようなものだ。

セカケル・パンヤール通りをターンしてネジャリーン（大工たちの意）広場に出る。メディナの繁華街でイスや机の手作業での木工品づくりの現場を眺め、18世紀ごろのホテルや彫刻に彩られた泉を見せる。

やや南西に進むと修道院がある。これはザウイア・ムーレイ・イドリス廟で9世紀初めフェスのメディナを建造したムーレイ・イドリス2世の墓でもある。犯罪者でもここに逃げ込めば保護される駆け込み寺で聖域とされてきた。

再び、カスバ・アン・ヌアール脇を抜けブー・ジュールド門に出てモハマドのメディナ案内は終わった。

メディナのなかに車は乗り入れられない。1000年以上も廃墟となることなく、さまざまな品を販売する商店街が、スーク（市場）が形成され、今日に至っている。

メディナ内の建物配置をみるとさほど大きくないモスク（イスラムの礼拝所）を中心にスークや居住区があるように見える。

モスクにはミナレット（金曜正午の礼拝を呼びかける尖塔）があり、体を洗淨するための泉亭のある中庭がある。泉亭は一見小さなプールに見える。

礼拝はミフラブ（メッカの方向を示す壁のくぼみ）、説教壇やコーランの置き台があるが祭壇や聖像の類はない。

モスクの入り口にも洗淨用水場があって水道水が蛇口を伝わって出る仕組みであるが、今日では日常の生活用水として使われている。

ポリバケツを持参した主婦が水汲みをして帰る。時には混み合っただけ列をなしている。

フェスのメディナ内のモスクは観光客に開放しているが、部外者からは入場料を徴収している。

後半、モハマドは土産物店中心に案内を切り替えた。私は買い物に興味が無かったので最初の内は案内だけだったが、次第に商店主と一緒にしつこく土産物を買うよう勧めた。

当然、販売額に応じて店からバックマージンがあり、一定額キックバックがなされる感じだ。世界中何処の地域でもある観光地型光景である。

元々価格設定にしっかりした根拠などないので、提示された商品価格の半分の値段なら考えてみてもいいといえ、半額になってしまうのが不思議だ。

アリの紹介したガイド、モハマドは3時間半の説明を終え、我々を昼食へと導いた。頼みもしないのにガイド知り合いのモロッコ料理店にタクシーで案内する。広いレストランの昼下がり、殆ど客がいない。酒類も置いていないガランとした空間。ガイドは注文を聞いて発注し、我々が食べ終わるまで店の外のイスに腰掛けて待っている。食事は煮込み料理のタジン。モロッコの料理は煮込みものが多いが「タジン」はジャガイモ、人参、タマネギと鶏肉を陶器で煮込み、サフランなどのスパイスで味付けして、三角帽子のような陶器の蓋をしてある。代金は1人1200円とこの辺りの食事としてはかなり高い。ここでも店とガイドの間に一定の取引が成り立っている感じがした。

文献でフェスのメディナを調べてみる。

13世紀後半、遊牧系ベルベル族が首府をフェスに定め、その勢力はジブラルタル海峡を越え、イベリア半島に及んだ。

その痕跡はセビーリアのアルカサル（イスラム風宮殿）として残っている。いま博物館、美術館としてアルカサルはセビーリアの大聖堂の隣にあり3日前訪れたばかりだった。

スペインのアンダルシア地方はキリスト教徒によるレコンキスタ運動がおこり、スペインからのモロッコ移住者が増えた。彼らは首都だったフェスに陶芸や彫刻、絵画のデザイナーや技術者が移り、モロッコにマグレブ・アンダルシア文化が栄えたのだ。

アンダルシア地方セビーリアのアルカサルはキリスト教徒の王たちが14世紀のなかごろスペイン各地からイスラーム職人を呼び寄せて漆喰細工を駆使したパティオや杉板を彫った彫刻の壁・天井、アラビア風の絨毯、陶芸モザイクなどイスラーム文化がしっかり根付いている。

マラケシュのクトウビーヤ・モスクのミナレット（尖塔）、ラバトのハサン（モスク）そしてカサブランカのアルカサルは同じ建築様式で建てられた兄弟塔といわれるようにモロッコとスペインの関係は深く、両国の歴史はモスクに刻まれている。

南ヨーロッパを支配しているカトリック教の象徴チャーチやカテドラルと同様に、イスラーム世界では巨大なモスクが至る所に尖塔を構え威厳と威圧感を漂わせているのだ。

こうした建物の内部もまた構造や掲げられている彫刻、絵画、建築物の様子は異なるが、芸術性の観点からは一定の水準の高さを物語っている。



とかく西欧社会に影響された日本人は先進文明の欧米、遅れたイスラーム世界を喧伝しがちである。

コロンブスの新大陸発見もイスラームのアルファヌガヌスの地図なしに考えられないし、ヴァスコ・ダ・ガマのインド航路発見もアフリカ南部からインドまでの水先案内人がイスラーム世界の人々だったことを考えると、一時期イスラームが世界文明をリードしていた時期もあったはずだ。

西洋的な近代科学の体系は古代ギリシャにあったことは疑いない。

9世紀初頭バクダードなどで、総合化、理論化された数学、医学、化学、工学、航海術などの理論体系は中東イスラーム世界でアラビア語に訳され発展を遂げていた。従ってヨーロッパにもたらされたルネッサンス以降の文明、科学技術はイスラーム世界を經由しているのであることを銘記しておかなければなるまい。

我々は、18世紀以降、イスラーム文明の影響と役割をぬぐい去ってヨーロッパが自力で高度な文明を築いたように言い換えたことを疑いない事実として認識してきたのである。

今日、進んだキリスト教世界、遅れたイスラーム世界のイメージが定着した。

ビンラディンやオマルによって引き起こされたとされる9.11事件の後、ロサンジェルス郊外に宿泊しようとして宿を探した。

嚴重に施錠された正門入り口、インターホーンで自己紹介しキーを開けて中に入った。鉄格子に囲まれたフロントデスクがある。昔の銀行で鉄格子を介して客と銀行員が話し合う状況に酷似している。経営者はイスラーム教徒でアラブ人だった。

イスラーム教徒がアメリカ合衆国で事業を展開することの難しさと恐ろしさ、そして自己防衛は恥も外聞もなく強固にしなければならないことを痛感した。

しかし、国家全体がイスラームに染色されたモロッコではその心配はない。

## 17, ムスリム女性のスカーフ

キリスト教世界を基準に生きてきた者にイスラーム世界は異様に映る。

「汝の身の飾りとなるところを隠せ」、「頭髪を人にさらすな」で女性はスカーフを被り、地べたを引きずるような長いスカートを履いている。これはイスラーム教の規範であり、教えの一部をなしている。

モロッコのヨーロッパ玄関口タンジェの街に入って眼にする風景は女性のスカーフ姿と男性に多い三角帽から足下に届くマントのような外衣である。

女性のスカーフは中高生のような生徒、若年層を除き、完璧なほど多くの人々が纏って

いる。マントのような外衣は歳を重ねた老年層に多く、男女の別なく着用している。羊飼いやなども着衣している。

イスラーム以外の宗教圏では「女性がスカーフを被るのに、男性は何故しないのか」、「女性だけに強制するのは男女不平等」といった意見が聞かれる。

コーランには髪を隠せ、とする記述は見あたらないらしい。「だが汝の飾りとなるところ」「隠しどころ」は覆えとある。(内藤正典著「ヨーロッパとイスラーム」)

若い女性のなかには、髪どころか眼の部分を除き頭から顔全体を黒い布で覆うものもいる。タンジェの街で小学校の校庭を飛び回っている子供たちをみると必ずしもすべての女の子がスカーフをしているわけではない。

内藤は前著のなかで「隠しどころ」とは、日本語的に表現すれば陰部である。ムスリム女性が、イスラームの教えどおり、髪を性的な部分と考えているなら、下半身に下着をつけてスカートなり、ジーンズを穿くのと同一ことを頭部に行っていることになる。イスラームの教えに従って自らの意志で被る人もいる。嫉妬深い、あるいは所有欲の強い夫が「髪を他の男にさらすな」と命じるために被っている人もいる。未婚の女性が髪を隠さないと「ふしだら」に見えるから被っている人もいる。

家の中でも女性が食事をする場所、寝る場所、くつろぐ場所が男性と別々に設定されている場合もよくみかける。

これはキリスト教圏では考えにくい慣習であるが、イスラーム教徒がすべて日常的におこなっているとも限らない。

いまさら女性の髪が性的意味をもつものではないから被らない、コーランにそんな教えはないと解釈して被らない、などの理由もあろう。

イスラームの教えでは「アルコール分は摂取しない方がいい」となっているが掟というほど拘束力はない。酒を出すレストランやバーがあれば、酒販店もある。これは街によってもマチマチ。タンジェでは酒販店やバーはあまり見かけなかったし、ホテルのフロントも教えてくれなかった。フェスやカサブランカでは比較的容易に探し当てられた。

熱心で敬虔なムスリムはイスラームの教えを忠実に守るがそうでないひともある。

モロッコはワイン生産で著名であることもあり、酒に酔っている人も見かけたがイスラーム教徒であるかどうかはわからない。

モルモン教徒には、酒、コーヒーのような刺激物は飲まない、との掟のようなものがある。モルモン教徒の比率が高いソルトレーク市内には酒場が見あたらない。ビールなど低アルコール品を除く酒販店も減多のことで探しあてられない。モルモン教徒以外の宗教や、無宗教の人々も住んでいる筈だ。

だが周辺の州は規制外だから、そこまで酒類を求めていたり、州外の酒場で遊ぶ教徒もいる。これらの人々はジャックモルモン（日本語的にははぐれモルモン）などと呼ばれる。規則を守らない厄介者というわけだ。

宗教は精神的世界の掟に縛られているものであるから、掟を破ったからお灸を据えられることもなからう。

だがこの世界はモルモン教徒でない生活者でアルコールを日常嗜む人々にとってはまことに具合が悪い。その点、イスラーム世界の方が気楽であるかも知れない。

スカーフを被っている女性に、スカーフをはずすように命じたり、強引にはぎ取ったりする行為はどうだろう。それはカトリックの修道女が纏っているヴェールを剥ぎ取るに等しい。

ムスリム女性のスカーフ着用が、男女不平等とか、性的部分は隠せといった議論は、イスラーム世界で起こっているのではなく、もっぱら欧米大陸への移住者やガストアルバイターなどのイスラーム教徒が、キリスト教徒などから異端視されている状況のなかで起こりやすいといえるだろう。

## 18. 言語と宗教の世界

モロッコは複族国である。民族的にはアラブ人 65%、ベルベル人 35% で公用語はアラビア語になっている。この数値比率は公式統計によるものであるが、実際はベルベル系が半数を占めるのでないかとの主張もある。アラビア人はアラビックを、ベルベル人はベルベル語を使う筈だが、今日ベルベル人でベルベル語を知らない人もいればアラビア語、フランス語、ベルベル語の 3 言語を使い回す人々もいて区別がつきにくくなっている、といわれている。(前述 私市正年)

1912 年モロッコの大部分はフランスの保護領になり以降半世紀以上に渡ってフランスの文化的影響を強くうけたからフランス語が定着した。

日韓併合は 1910 年であり、35 年に渡って日本統治を受けた朝鮮半島で深く日本語が浸透した時期に相当する。

英語の浸透は、ヨーロッパ大陸に比べて極めて弱い。「ありがたいことに宿のオーナーは英語が出来たのでバスの定刻時間がわかった」(小林けい「ベルベルの村の一夜」)に代表されるように、ごく一部の人々に限られている。日本の英語浸透状況に似ているかも知れない。

空港や高級ホテル、高級レストラン、鉄道の発券所、銀行などは英語で通じる。安ホテ

ルや一般のレストラン、商店、土産物店、タクシーの運転手で英語の喋れるひとは殆どいない。

旅ではホテルの電話予約やタクシーで行く先を指定しても通じないのは支障が起こりやすい。

レストランで料理メニューを見てもアラビックは理解することは難しいし、英語が通じないとなると注文の段階で疲れてしまう。結局、適当な店で食材を購入してホテルで食べるのが手取早い。スーパーマーケットやコンビニも滅多に見かけないから食材購入も楽ではない。

土産物店で話されている英語は商品を売るための一方的な喋りで、こちらからの質問には答えられる英語力は持ち合わせていない。

イスラーム教徒の礼拝所はアラビア語で masjid といわれ、フェス、タンジェ、カサブランカのどの市域にも多くある。丁度、タイやミャンマー（ビルマ）や京都や奈良の仏教寺院の如く。

そのなかでも金曜日正午の集団礼拝を行う大モスクは masjid al-jami' というのである。

カサブランカに比較的最近（1993年）完成したモロッコ随一といわれるハッサン二世モスクがある。これを見ていると形式や宗教の性格は違うがサンピエトロ寺院やセントポール寺院のような威厳を感じ、神と宗徒の関係でいえば神の威圧にひれ伏す宗徒を目のあたりに見せつけられる思いがする。

そして神の背後に見え隠れする権力者の野望、神に従うことはすなわち権力に対して従順であることを誓わせる雰囲気漂う。

大西洋に突きだした海辺に9ヘクタールの土地、モスク内が2ヘクタール（6万坪）、内部には礼拝のための宗徒2.5万人が収容でき、同敷地内の礼拝者も集めると8万人規模がメッカのアッラーの神に礼拝し、現世、来世、神の世の恵みを誓うのである。

モスク内は海、太陽、風をモチーフにした大理石彫刻、木彫、モロッコ絨毯に彩られているが、その全ては手作りである。ミナレット（尖塔）の高さは200mと高く、カサブランカのどこからでも見ることができる。何処のミナレットも角型で幾何学紋様が施され窓も装飾の一部になっているようだ。

地下には大理石（モロッコ産）の手足を清める泉や浴場がある。

モスク内は1200円程度の入場料を支払い見学することができるが、この巨大な施設が国民の税金と寄付金で建てられ、カサブランカ市の大きな財政負担になっているというか

ら入場料の必要も出てきたのであろうか。

もっとも最近では、観光地にある多くのモスクやカトリック教会なども礼拝時間を除き、観光客からは拝観料を取り立てているものが少なくない。

観光地が宗教施設を前面に押しだし、施設の芸術性の高さを売り物にしても内容については案内も説明もなく宗徒の日常生活の多面性については殆ど伝わってこない。

モスクでのイスラーム教礼拝は、メッカの方向に向かって跪き「アッラーは偉大なり、いざや礼拝に来たれ、成功のために来たれ、アッラーの外に神なし」といったことを繰り返し、頭を地べたにつけて祈る。文句を唱えるのは礼拝集団の誰か1人でこのアザーンという内容を発声する。肉声で行い、マイクや鐘等は使わない。敬虔な信者の中には、頭に折り胼胝（たこ）ができていている人たちもいる。

## 19. 地中海性気候地域の土地利用景観 1

(タンジェ, フェス, カサブランカ)

ジブラルタル海峡沿いのタンジェ駅は最近オープンしたばかりの郊外駅だ。新駅周辺は開発予定地であるが殆どビルもない未開発、未利用な雑草地になっている。

フェス、メクネス、ラバト、カサブランカもそうであったが、大都市中心駅の立地が市街地の核になっている中心付近にあるのではなく郊外、街はずれになっている場合が多い。

従って鉄道駅前の商店街の発達が乏しく閑散としている。

アメリカにおいては、ニューヨークなど巨大都市を除けば鉄道駅周辺は非常に寂れているのが一般的だ。かつて賑わっていた場所は、鉄道旅客輸送の落ち込みで駅前の商業機能が他に移ってしまったまでで、以前から閑散としていたわけではない。

モロッコの場合は駅の立地が線路で市街地と農地を区分するような場所、つまり、市街地の外れ、境界線近くにある。

線路が市域の中心を貫くと街の機能が二分されたり、立体橋を多く構築したり面倒な問題が増えるのだが、その点はすっきりしている。鉄道を利用する市民も少ないので問題は今のところない。

タンジェ駅でフェスまでの切符を買うが、券売所の駅員は英語を話す。タンジェに来てから安ホテル、タクシー、レストランで英語が通じず苦労を重ねたから「意志が通じるうれしさ」を味わった。これは他の駅でも概ね言葉の壁はなかった。

タンジェとフェスの間是一等車で3000円強(2人分)。二等車より1000円高いが清潔でエアコンがあるから切符を買い換えた。距離は400km、5時間の乗車時間。モロッコの

汽車は安いし、定刻通りの発車、到着と時間に正確なことがわかった。

市街地を出ると直ぐに緑青々した畑作地帯に牧草地が展開する。地中海性気候地域の3月は雨期と乾期の代わりどころである。冬は雨期でマイルドだが夏は砂漠のような乾燥帯になる。

3月の降水量は東京よりやや少ないが、気温は若干高い。雨量は50mm程度、気温は10～15度Cだ。

イタリアやスペインの地中海性気候を見てきた者にとってこの濃い緑の田園風景は驚きである。モロッコの場合、国のほぼ中央を北東から南西に向かって、モワイヤン・アトラス、オート・アトラス、アンチ・アトラスなどいわゆるアトラス山脈が走行しているからこれを越えた東側はサハラ砂漠であるが、西側は大西洋、北側は地中海の影響を受けやすく湿気も強い。

3月、ホテルで洗濯したものは1日では乾かない。

この緑地は単に降水量のせいだけでない。水路が迷路のように各畑地を結びつけ、幹線水路は直径1mのハーフパイプになっていて地上1mくらい嵩上げした場所に設置されている。

ヨーロッパ大陸の灌漑方式はピボット・セントラルをはじめ各種スプリンクラーが全盛であるが、モロッコは水路網灌漑で緑を確保する。スイスやフランスの田園風景に似て作物の種類も多い。

サトウキビ畑、コムギ畑、ブドウ畑、リンゴ畑、オリーブ畑などが展開するが、ときに水田がある。牧草畑や野草の放牧地も目立つ。放牧に使われている家畜は、羊・牛・山羊が圧倒的に多い。

ヨーロッパやアメリカのように、牧場に牧区、あるいは牧柵というものがない。羊の群や牛群を管理するのは棒を持った牧童（牧夫）達である。この風景は牧歌的で絵になる光景であるのでいたるところ絵画的風景がみられるとっていい。

牧童といっても子供は少ない。年齢を経た男性や女性、青年から壮年まであらゆる年齢層に及んでいる。

ケニヤやタンザニアのマサイ族やチャガ族も同じであり、労賃の安いことを窺わせる。

放牧形態としては遊牧とは言えないし、企業的牧畜とも言い難い。

コバルトブルーの大西洋が車窓の西側に見える。アシラの駅を出るともうフェスまで海にはお目にかかれない。

オリーブ畑はスペインのアンダルシア地方のように多くはないが整然と植えられ、リン

ゴ畑の白い花，もも畑のピンクや黄色の花のコントラストが美しい。

モロッコの統計書をみると，耕地は日本の2倍以上の900万ヘクタール，農民1人当たりの耕地は7ヘクタールで北海道の半分だが，規模の格差が大きく富裕層の大規模土地所有と耕地無き小作人が明瞭である。

格差社会は農村だけでない。都市部の格差も一段と大きい。1人当たりの国民所得は1300ドルで日本の30分の1である。だがこれは富裕層と貧困層の平均値であり，貧富格差という後進性が解消されずにいるのが実態だ。

最暖月の平均気温は20度C前後で札幌より低い，播種・収穫作物の種類は実に多い。

米・麦類の穀物，トムロコシ，イモ類，落花生，ひまわり，オリーブ，サトウキビ，野菜と果樹，畜産と多彩だ。

面白いのは，例えば日本ではテンサイは北海道，サトウキビは沖縄県と棲み分け，馬鈴薯は中部以北，サツマイモは中部以南と栽培地域が分かれているが，モロッコでは同居していることである。

土壌は概ね石灰岩の風化したテラロッサ土で水はけはいい。輪作状況はよく分からないが土壌収奪もそれほど進んでいるようにもみえない。家畜と穀作を組み合わせる混合農業（ミックスト・ファーム）が基本に置かれているからかもしれない。

農業の機械化も進んでいない。馬耕による耕起風景は見られるが，外は全て手作業中心に組み立てられている。

これから，機械化，化学化などの近代化が進むであろうから労働生産性，土地生産性とも上昇すると思われるが，近代化の推進には資本が必要だ。

先進国から資本や技術が持ち込まれれば，そこにはまた価値の収奪が生まれる。のどかな今の農業環境や人力中心社会がいいとまで言っていられないかもしれない。

## 20, 地中海性気候地域の土地利用景観2 (フェス, シデーカセム, カサブランカ)

北緯35度は東京の緯度である。フェス，メクネス，ラバトはほぼこの緯線上にある。

大西洋岸でありながら3月15日はガスが充満して寒い朝でアノラックを着用した。フェスのホテルピエーラに2泊分の宿代8800円（2人）の支払いはカードで出来ないといわれる。

チェックインの時カード支払いは可能と確認したはずだといっても，駅前に24時間取り扱いのATMがあるからキャッシングして来いとフロント。

アラビア語では読めないといえば、ボーイを同行させてくれた。午前7時前である。

ホテルから歩いて5分くらいの所に銀行の自動支払機がある。ボーイにアラビア語を読んでもらいながらカードを差し込むとカードは戻らないし、現金も出てこない。他人も利用する機械だが何時カードが飛び出してくるか、わからないので現場にボーイを残し銀行入り口を探す。銀行の開店は8時半である。カサブランカ行き列車は9時発だから開店時間まで待つわけにはいかない。

8時過ぎに最初の銀行員が出勤したので事情を説明する。彼の回答は支払機を取り扱える鍵を持参している銀行員が来なければカードは取り出せないから銀行内で待てという。

次々、銀行員が出勤してくるが彼らはお互いに抱擁したり、キスしたりの朝の挨拶風景だ。これはフランスか、と思った。

8時20分に係りの者が来て支払機の中にあったカードを戻してくれた。抗議をしない暇はない。その銀行員を外の支払機まで同行させキャッシングを済ませホテルに向かった。汽車にはぎりぎり間に合った。

フェスからカサブランカまでは5時間だ。フェスの駅のプラットホームにはオレンジ樹が並木状に植え込まれておりたわわな実をつけていたが、濃霧が周辺の景色を覆い隠していて釧路の朝を思い出した。

列車は西に走ってメクネスを越えると天気が回復し青空が見えだした。

ブドウ畑で草取りをする農夫達は色とりどりの作業衣を纏っているが手作業だ。手撒き用消毒器を肩に掛け2人で噴霧する。機械化の姿は見かけない。農業用耕地のあいだに空き地や野草地があるがこれを放牧用に利用しているから、日本の農村地帯で見るような集約性は感じられない。土地利用が全体として粗放的だ。シデーカセムからケニトラにかけてユーカリなどの平地林が卓越しているが、ところどころ伐採して耕地化している。目下新しい耕地が生まれている状況である。

森林の伐採も手作業で行われている。伐採後の木株も掘り起こされているが機械によるものとは思えない。伐採労働者の休憩所兼宿泊施設は簡易テントだ。大きめのテントが幾つも組み立てられていて材木運搬用トラックもある。

伐採されたユーカリ樹はマチの貯木場に集められている。

畑地は小麦、牧草、オリーブ畑、ブドウ畑、ミント香料野菜などで3月のモロッコを彩る色彩は緑一色といえる。雨期の冬期間を終えて、次第に夏枯れの大地に変化していく最もいい季節かもしれない。

ケニトラからラバトを越え、モハマデア、カサブランカと大西洋岸に沿って汽車は進む

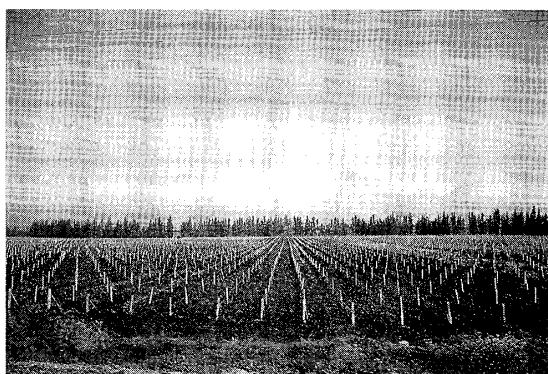


が、この辺りは街が連続していて一種のメガロポリス（連結都市群）の様相を呈している。

もちろん、日本の東海道やアメリカの大西洋岸メガロポリスと比べれば規模は小さい。

従って、このモロッコメガロポリスで農業的土地利用もあまりみられない。

時折見える大西洋のやや薄い青の海水に白い波、濃い青空のコントラストが美しく、カサブランカの郊外海浜リゾートのモハメデアの存在がうなずける。



幼木ブドウと柵，モロッコも地中海性気候でブドウ栽培が盛んである。醸造用ブドウの比率が高い。

## 21. カサブランカ市街

カサブランカをテーマにした映画や歌はいくつもある。城塞、支配者の居住地でメディアナの内外を監視するカスバの存在もカサブランカと結びついている。

カサの町は人口が300万人である。人々が最も利用する鉄道駅カサ・ヴォワヤジャーは日本で言うと人口10万人以下の町の駅ほどの規模でしかない。住民が殆ど自動車を利用していないことによる。こんな風景はモロッコのどの駅も共通している。

一般市民が日常この交通機関を利用しているわけでもない。人の移動範囲が極めて限定的であるのだ。

駅前のタクシーはボルから気をつけろと案内書にある。駅構内でうろうろしているタクシー運転手にプラザホテル（1泊2人3500円）を指示し、料金交渉でタクシー代600円とした。途中で運転手は「同じ料金ならもっといいホテルがある。ホテル・カサブランカだ」というから同意した。駅からの距離はほぼ同じという。この宿代は4400円だった。

ホテルに着いて、フロントマンに駅までのタクシー料金を聞くと130円という。メーターのあるタクシーとないタクシーがあるので注意を要する。以後、観光客が乗り降りする場所でタクシーを拾う時は、徹底した料金交渉をすることにしたのである。

ホテルから西に30分ほど歩いたところにハブブス街と呼ばれるフランス植民地時代

(1923年)に造られた新市街地がある。ハブブース、ヴィクトル・ユーゴー通り、ムーレイ・ユースエフ広場などフランス語地名に彩られたショッピング街でトンネル状のアーケードや通用門など、モロッコの古い建築様式とフランス式近代建築の調和を狙ったとおもわれる風情のある町並みだ。

石畳のアーケードはスーク（市場）になっているが、売られているものは、モロッコの特産品であるスリッパ型革靴（バブーシュ）、真鍮製や銀製のミントティー用ポット、香油や陶器、皮製品などであるが、地元住民よりも観光客目当てのものが多く、しつこく付きまとう店員、割引話は売値の半分くらいまでになるから、売値など信用できない。真面目な人はソンをする、そんな風景が何処の店でも見られる。

ハブブース街からリボン通りを經由してダウスタウンに向かう街路の両脇は高い塀とゴージャスな屋敷森のある高級住宅地であり、門から出入りする高級乗用車をみていると日本の田園調布か自由が丘の住宅街路を歩いているような錯覚になる。ただ違うのは時折、住宅を護る守衛（私警）が常駐していることくらいか。

途上国に共通していることは、一握りの富者と、数多くの貧しい人々の群が街区のなかで棲み分けているという現実である。

モロッコの失業率は10%と表示されているが、働いていない人々はもっと比率が高いのではないか、が実感だ。

ダウスタウン中心部にフランス・ムーレイ・アブダラー通りと名のついたモールがある。南北200m程度のあまり広くないショッピング街だ。有名ブランド品店やレストラン、ホテルもある。レストラン「東京楼」は日本人ではなく韓国人経営の食堂である。



カサブランカのハブブース街で旅人に興味を示すイスラームの中学生達。

地図を購入するために買った書店にモロッコ料理の店のありかを尋ねると、アブダラー通りの北はずれからやや西にある「イミルシル」を紹介してくれた。

店の玄関にフランス人風の紳士が立って「私はこの店のオーナーです。お入り下さい」という。

ドアを開けると壁、天井まで芸術的なタイルモザイクが張りつめられ、高級できらびやかな調度品が所狭しと置いてある。オーナーは奥から「地球の歩き方」を持参して、これに自分の写真と日本人の客が写っていると見せてくれた。日本人が来ると、この書物を持ち出し、客のご機嫌を窺う商売をしている。

案内書には、「家族経営のアットホームの味が自慢」と書き込んである。

イミルシルのモロッコ料理の特徴は、前菜がシュクシューカやケフタ、メインデッシュがクスクスメゾン、ワインは著名なベン・スレイマンという土地で生産された赤だ。

クスクスは北アフリカを代表する煮込み料理である。

スモールと呼ぶ蒸した小麦にそらまめ、人参、ズッキーニと鶏肉、羊肉を煮て混ぜて食べる。スパイスというか、香辛料の使い方にコツがあるらしい。

モロッコ料理は煮込み料理が一般的で、タジンはモロッコ人が日常食べている。陶器の厚い容器を利用するのは熱いうちに食べるのが習慣だからか。

この店のサラダは葉野菜とトマト、ピーマン、キュウリ、タマネギが多くみられる。量の多いのとクミン風味のドレッシングが異質だった。

## 22, おわりに

アフリカには53もの国連加盟国がある。第二次世界大戦前、独立国といえばエチオピアとリベリアの2ヶ国だけだった時代もあった。戦後、ヨーロッパ列強の支配を振り切って50を越える地域が独立国になった。独立までの道筋は平坦ではなかったが民族自決の運動は遼原の火の如く広がっていく。政治的独立は果たしたが先進国の経済援助を必要とした国々も少なくない。ガーナのエンクルマ大統領は、先進国の経済援助を「援助と言う名の支配」といったほどに、政治的独立を果たしても経済的従属、部族間対立の矛盾につけ込んだ先進国の支配は続いてきたのである。

独立後、社会主義路線を歩む国家（タンザニアなど）も出現したが、民族の安全と経済的安定を保障する状態になっていない。アフリカ大陸で恵まれている地域と称される東アフリカ諸国は、外資の導入や先進国観光客の急速な流入で貧富の差が増大し、ひいては犯罪の温床になる矛盾に悩まされている。アフリカで国民所得が最も高い地域は観光保養地

で外国人を呼び込んでいるセイシェル、カーボベルデ、モーリシャスなどの島国、鉱産物輸出収入の多いリビア、南アフリカ、ボツワナ、ガボンなどだが、国民所得が5000ドルを越えている国はない。どちらかといえば一人当たりの国民所得の高いチュニジア、アルジェリア、モロッコなどマグレブ諸国も例外に漏れず石油や燐鉱石輸出が国の経済を支えてきたが、アフリカ諸国の中では観光収入が多い地域でもある。

地中海沿岸地域にあってヨーロッパ大陸に近く観光客を呼び込むには好条件である。モロッコを例にとると輸出総額が年間78億ドル（02年）であるのに対し、観光収入はその半分に達する38億ドルになっている。モロッコといえば燐鉱石と象徴されていた時代は終わったかに見えるほど観光業が盛んになっている。

こうしてアメリカ、日本、ヨーロッパ諸国から購買力のある観光客が押し寄せると現地人にとって奇妙な異文化の侵入では済まされない軋轢が生じる。

現地人のなかで外国人と接触できるサービス、金融、商業などに携わる職業の人々には巨大な利益がもたらされ、一般国民との間の経済格差は拡大するのだ。

国民のなかに生まれた新規の富裕層、外国人観光客と一般国民のあいだの矛盾はひとつひとつの心を助け合いから、篩い落とす関係に変えていくのである。

モロッコの旅は、そんなアフリカ大陸の一角に存在する問題が決して僅かな地域問題で済まされない様相をていしているのではないか、との考え方に立たされる。

ニューヨークやワシントンが9.11テロで襲われ、その犯人はアラブ系の人物18人と断定された。以後、アメリカに住むアラブ人やイスラーム教徒に対するアメリカ政府やキリスト教徒の眼は一層厳しいものになった。

ロサンゼルス郊外のアラブ人経営のホテルに泊まった。入り口のインターホンで泊まりたい旨を告げ、ドアの施錠が解かれる。フロントは鉄格子で区画され、小さな窓口を通して宿帳記入や金銭の支払いが行われる。他のホテルでは考えられないものしさだ。現在のアラブ系の人々にとって、アメリカで住むには自らの自己防衛が必須の条件である。

100人をくだらないアメリカでの拉致者数。殆どがアラブ人でテロリスト容疑（と思われるがそれすら告げられない）でシリアのダマスカスやキューバのグアンタナモ基地に送られ、拷問にかけられ、強制労働を強いられる。「秘密移送」といわれ、ブッシュ政権は公然とこの事実を認めている。国際法に抵触するがテロリストは別途の考え方だ。

横田めぐみさんの母親がブッシュ大統領に会って、拉致問題の協力を求めたとき、大統領は「北朝鮮という国家が拉致するなど考えられない」といったが、秘密移送はアメリカ合衆国国家の拉致ではないと言い切れるのだろうか。

ビンラディンやオマルが9.11テロ首謀者であることを理由に、潜伏先のアフガニスタ

ンを攻撃、勝敗もわからないまま一部の米軍を除いて、大部分の軍隊は撤退した。

ビンラディンやオマルも捕らえられていない。彼らは公然とマスコミに登場し、イスラーム教徒の結束を訴える。本来戦争ではなく犯人を捜索し、逮捕するのが筋ではないかと思うがそれすらアメリカには出来ない。

イラク戦争も、大量破壊兵器を理由に開戦したが、兵器は見つからなかった。陰に、イスラーム世界憎しから始まったようにも写る。

アメリカは、スンニ派とシーア派とクルド人の対立と亀裂を利用して兵力を投入し、同盟国の実戦援助まで得て侵略と殺戮を繰り返したが、イラクでの戦況は好転しない。戦争は終結し、選挙による民主的内閣が出来たと言うが、内戦は収まらないどころか矛盾は拡大している。

イランの核疑惑対応で開戦の準備が進む。イラク、イランは世界最大級産油国であり、石油の供給不安が原油価格の高騰に繋がっているとの論調がある。

ブッシュ、チェイニー、ラムズフェルドは石油関連会社と関係が深いとの報道もある。人間の頭脳が極限に達している 21 世紀、いまだにお粗末な宗主国感覚の国際関係が続いている。

そんな折り、7世紀から8世紀にかけてイスラーム教徒がイベリア半島や地中海の北岸に侵入し、キリスト教徒が中・北部ヨーロッパに逃れた。北ヨーロッパにはバイキングが出没し、勢力を拡大した時期だ。

スペインやポルトガルにはイスラームの影響を受けた遺産が沢山残っている。

特にアンダルシア地方コルドバやセビーリアはそれらの宝庫である。

キリスト教のレコンキスタ以後も、キリスト教徒によって護られ、築かれたアルカサル(王宮)やモスクもある。

2つの宗教文化が宗教対立の結果として破壊されあうのではなく、建築、美術、造園などをはじめ芸能・芸術、音楽などの文化遺産も含めて支え合い、融合しあって今日の状況を築いた成果を、もう一度今日の政治状況に生かせないのだろうかと考えてポルトガルとスペイン、モロッコを歩いてみた。素晴らしい遺産が沢山あった。そのことを書き残して置きたかったのである。

知恵のあるべき人間が、殺し合いだけに精をだすのはぼつぼつ終わりにしたいものであり、もう少し深く先人の知恵を学んでいく必要がある。

## 参考文献

- 林屋永吉・野々山ミナコ・長南実・増田義郎著「コロンブス、アメリゴ、ガマ、バルボア、マゼラン航海の記録」『大航海時代叢書1』岩波書店 1965年7月
- 辻光博『アンダルシア物語』書肆季節社 1983年6月
- 増田義郎「読んで旅する世界の歴史と文化」『スペイン』新潮社 1992年2月
- 在スペイン大使館・在ポルトガル大使館編『世界各国便覧叢書』「スペイン・ポルトガル共和国」日本国際問題研究所 1984年5月
- 川成洋『スペイン雑記』南雲堂 1990年10月
- 飯塚浩二「大航海の時代」『飯塚浩二著作集2』平凡社 1975年10月
- ミシュラン・グリーンガイド『スペイン』実業之日本社 1995年10月
- 日経ナショナル ジオグラフィック社『スペイン』日経BP出版センター 2001年6月
- 東谷岩人編『スペイン入門』三省堂選書167 1992年4月
- エディルックスS・L原作，坂本梢訳『セビーリア』コパルトクラブ エディルルックス社 2005年
- 碓 順治『現代スペインの歴史』激動の世紀から飛躍の世紀へ 彩流社 2005年5月
- シャルル・エマニュエル・デュフルク著，芝修身・芝紘子訳『イスラーム治下のヨーロッパ』藤原書店 1997年4月
- 内藤正典『ヨーロッパとイスラーム』岩波新書 2004年8月
- 小林けい『来て見てモロッコ』凱風社 2000年2月
- 今村文明『迷宮都市 モロッコを歩く』NTT出版株式会社 1998年2月
- 二宮書店「2006 データブック オブ ザ ワールド」『世界各国要覧と最新統計』 2006年2月
- 岡村豊彦『突然ですが、僕モロッコに行ってきます』碧天社 2005年5月
- 金七紀男『ポルトガル史』彩流社 2003年4月
- デビッド・バーミンガム著，高田有現・西川あゆみ訳『ポルトガルの歴史』創土社 2002年4月
- 四方田犬彦『モロッコ流謫』新潮社 2000年3月